

60

239

近世醫學叢書

第四十七編

醫學士加用信憲編

呼吸及其療法

南江堂書店發行



60-239

近世醫學叢書

第四十七編

醫學士加用信憲編

呼吸及其療法

南江堂書店發行

贈送  
4.10.11



序

本書ハゴールド、シユミット氏ノ近著「アストマ」ヲ以テ骨トシ是ニ  
肉付クルニ一般ノ内科書ヲ以テシ更ニ菲見ヲ以テ皮膚トシ、ノ  
ツ著服セシムルニ泰西ノ雜誌ヨリ得タル文献ヲ以テセリ。  
如斯ニシテ成レル本書ニ果シテ生命ノ存スルアリヤ否ハ余且  
知ル處ニ非ズ。切ニ諸賢君子ノ斧正ヲ俟ツ。  
因ニ紙數ニ制限アルヲ以テ、専ラ力ヲ實地ニ有用ナル治療法ニ  
注ギ、他ハ寧ロ夫ニ附加セシニ止マレリ。  
尙ホ本書ノ編纂ニ際シドクトル竹中繁次郎氏ノ篤實ナル教示  
ヲ受ケタルモノ多シ。茲ニ同氏ニ對シ謹デ感謝ノ意ヲ表ス。

明治四十四年九月上浣

編者 識



目次

第一 喘息ノ意義……………一

第二 喘息ノ分類……………三

一 癲痲性又ハ神經性喘息……………四

二 發作性加答兒性又ハ氣管枝炎性喘息……………六

三 慢性加答兒性喘息……………一四

四 永續性加答兒性喘息……………一五

五 精神性喘息……………一七

第三 喘息ノ原因……………一九

第四 喘息ノ病理……………二九

一 剖檢……………二九

二 喘息痰ノ主要成分……………三〇

三 喘息ノ本能……………三三



第五	喘息ノ診断	四〇
第六	喘息ノ豫後	四四
第七	喘息ノ療法	四六
甲	豫防法	四六
乙	治療法	四八
	a. 症候の療法	四八
	一 薬品の療法	四八
	二 精神の療法	七一
	三 物理的療法	七一
	b. 原因の療法	七八

# 喘息及其療法

醫學士 加用 信憲 編

## 第一 喘息ノ意義

喘息 Asthma=hauchen=kenchen トハ一讀字義明瞭ニシテ喘<sup>ア</sup>呼吸ヲ意味シ古來其泉源ノ那邊ニ在ルヲ問ハズ發作性ニ呼吸ノ困難ヲ喚起スルモノハ孰レモ喘息ナル名目ノ下ニ總括セシメタルヲ以テ喘息ナル語ハ單ニ臨牀的一症候タルニ止リ敢テ一完セル疾病ノ名稱タラザリシナリ然レドモ杏林未ダ茂ラズ研究ノ路拓カレザリシ昔日ニアリテハ恰モ彼ノ僕麻質斯ニ於ケルガ如ク更ニ分析シテ探究スルノ能ヲ有セズ依然一大病名トシテ公認サレ疑惑ヲ挾ム者ナカリキ其後醫學ノ著シキ發達ニ伴ヒ本病ノ研究ニ耽ルモノ踵ヲ接シテ輩出シ終ニ古來單純ニ喘息ナル名稱ノ下ニ掩蔽サレシ疾患ニシテ原因的許多ノ相異レルモノアルヲ識リ喘息ナル名稱ニ諸種ノ形容詞ヲ冠セシメ以テ其原因ノ歸スル所ヲ標示セシムルニ至レリ譬ヘバ



痛風性 A. arthriticum 發疹性 A. herpeticum 特異性 A. idiosyncraticum 消化不良性 A. dyspepticum 腸蟲性 A. verminosum 氣管枝性 A. bronchiale 心臟性 A. cardiacum 癩瘵性 A. convulsivum 子宮性 A. uterinum 胃性 A. pepticum 妊娠性 A. gravidarum 神經性 A. nervosum 鉛毒性 A. saturnium 汞毒性 A. mercuriale 尿毒症性 A. uraemicum 疼痛性 A. dolorificum 濕性 A. humidum 喉頭性 A. laryngeum 月經性 A. menstrualis 鼻性 A. nasalis 胸腺性 A. thymicum 喘息ノ如キ即チ是レナリ而シテ古來斯ノ如ク單ニ症候的汚名ノ下ニ屈從セシ喘息ヲシテ獨立ノ旌旗ヲ翻セシムベクカメタルハ有名ナルピール氏ニシテ氏ハ臨牀的ニ眞ノ喘息發作ナルモノヲ敘述シテ曰ク

喘息ノ呼吸困難ハ所謂呼吸氣性 (expiratorische Dyspnoe) ニシテ吸氣モ幾分カ緩慢トナルモ特ニ顯著ナルハ呼氣ノ延長ナリ而シテ呼吸時ニ當リテ著シク笛聲又ハ呷札性雜音及ビ異種ノ乾聲囉音ヲ聽キ肺ハ凡テノ方向ニ膨大シテ氣腫ノ状態トナリ助開腔ハ膨隆シ肺ノ打診音ハ所謂匣音ニシテ肝ハ下降シ心濁音域ハ縮小シ副呼吸筋ハ劇シク活動スルモノニテ而モ同時ニ必ズ肺臟ニ於テ加答兒ヲ證明シ得ルヲ通規トシ且ツ這般ノ現象ハ常ニ發作性ニ發現スルモノナリ

ピールメル氏ノ此定義ハ實ニ喘息攻究上一大紀元ヲ劃シタルモノニシテ現今尙ホ吾人ハ之ニ信賴スト雖モ近時彌々斯病ノ研究隆盛トナルニ從ヒビ氏ノ斷案ニ對シ多少ノ修正ヲ加ヘザルヲ得ザルニ至レリ何トナレバピール氏ノ喘息ニハ毎ニ肺ノ加答兒ヲ隨伴ストノ意見ハ其後フレンケルクルシュマン及アードルフ氏等ニヨリ左袒サレタルモゴールド、シュミット氏ハ稀ニ喘息ニシテ毫モ加答兒ヲ伍セザルモノアルヲ發見シ之ヲ名クルコ癩瘵性喘息ヲ以テスルニ至レリ加之ゴ氏ハピール氏ノ喘息ハ常ニ發作性ニ襲來スルモノナリトノ議論ニ反シ管ニ發作性ノモノハミナラズ非發作性ノモノモ亦存在スル事ヲ認定シ近著ニ於テ非發作性慢性永續性等ノ名稱ヲ用ヒ居レリ。

### 第二 喘息ノ分類

現今喘息ヲ分類スルニ種々ノ法アリ就中比較的廣ク採用サルルハ中毒性加答兒性及ビ反射性ノ三種ニ區分スル方法ナリ然レドモ此分類法ハ原因



病理解剖及び機能ナル三箇ノ相異レル標準ニヨリテ區別セラレタルヲ以テ論理上極メテ不妥當ナルノミナラズ實際上ノ不便モ亦鮮カラザルヲ以テ余ハ茲ニゴールド、シュミット氏ノ種別ヲ歡迎セント欲ス。蓋シゴ氏ハ喘息ヲ分チテ左ノ五種トス。

- 一 癲癇性又ハ神經性喘息
- 二 發作性加答兒性喘息又ハ氣管枝炎性喘息
- 三 慢性加答兒性喘息
- 四 永續性加答兒性喘息
- 五 精神性又ハ感應性喘息

今此區別法ニ隨ヒ左ニ箇々ニ就キ簡單ナル説明ヲ添加セシ。

一 癲癇性又ハ神經性喘息 *Asthma epilepticum s. nervosum.*

是レ加答兒ヲ伴ハザル喘息ノ一種類ニシテ病源ハ專ラ神經性ノモノト看做サレゴールド、シュミット氏ニヨリ初メテ明ニ他ヨリ區別シテ記載サレシモノナリ。要スルニ此種類ハ本態ヲ神經官能症ニ歸セシムベクアイヒホルス

ト氏ハ細氣管枝ノ漏斗ニ移行スル部分ヲ周匝セル細氣管枝括約筋ノ純神經性痙攣ト論ジタリ。斯カル患者ハ多クハ神經衰弱症特ニ性欲的ノモノ最多シ。歇斯的里等ニ罹リ居ルモノニシテ而カモ屢々發作ノ現ハルルハ是等ノ患者ガ劇シキ精神的感動ヲ受ケシ直後ニシテ平素ハ概ネ身體虛弱顏貌蒼白性極メテ神經質ナルヲ常規トス。ゴ氏ハ稀有ノ例トシテ麻拉里亞ニ續發シ而カモ規尼涅ニテ治療シタルモノヲ報告セリ。

此種類ノ喘息ハ他ノ加答兒ヲ隨伴セル型ノモノ特ニ發作性加答兒性喘息ニ比シ甚稀ナルノ差アルノミナラズ臨牀的所見ニモ相違セル點多々アリ。即チ發作ノ際如何ニ緻密ナル探索ヲナスモ肺臟ニ於テ毫モ加答兒症狀ヲ認メ得ズ。且ツ其發作ノ消散スルニ當リテモ治療極メテ迅速容易ニシテ往往單純ナル精神感應作用ニテ今迄サシモ猛威ヲ壇ニセシ呼吸困難ノ忽如トシテ霧消スル事アリ。尙ホ肝要ナル識別法トシテ吾人ノ常ニ留意スベキハ咯痰ノ肉眼的及び顯微鏡的検査ニシテ後章陳述スルガ如ク加答兒ヲ伴フ喘息ニアリテハ恒ニ咯痰中ニクルシユマン氏螺旋狀體、ライデン氏喘息結晶及びビエオジン細胞ヲ見而カモ是等ノモノハ診斷上缺如スベカラザル貴



重ナル目標トシテ見做サレ居レルガ吾神經性喘息ニアリテハ如此物體ノ未ダ嘗テ略出セラレタル事ナシ。然レドモ永キ經過中ニアリテハ其初メ明ニ神經性喘息トシテ確診セラレタルモノニシテ後加答兒ヲ挑發シテ所謂加答兒性喘息ニ移行スル場合アリ。又他方ニハ多年宿痼トシテ加答兒性喘息ヲ患ヘタル者ニ晩年神經性喘息ノ併發スル事モアルベケレバ斯様ノ際ニアリテハ診斷上多少ノ困難ナキ能ハズ。

## 二 發作性加答兒性又ハ氣管枝炎性喘息

*Ashma catarrhale paroxymale s. bronchiale*

吾人ノ日常遭遇スル喘息ハ多クハ此種類ニ屬スルモノニシテ通常性喘息 (*genuine A.*) 加答兒性喘息 (*A. catarrhale*) 神經性喘息 (*A. nervosum*) 反射性喘息 (*A. reflexum*) 痙攣性喘息 (*A. spasmodicum*) 自發性喘息 (*A. essentielle*) 眞性喘息 (*A. verum*) 等ノ名稱ハ古來多クノ學者ガ各々ノ異リタル見解ニ因ミ本病ニ附與シタル異名タルニ外ナラズ。

前述ノ如ク本書ニ加答兒性ナル形容詞ヲ冠セシメタル種類ハ他ノ否ラザルモノト相違シテ常ニ多少ヲ論ゼス肺ニ加答兒ヲ證明スルモノナルガ就中本症ノ他ノ加答兒性ノモノヨリ別タル所以ハ畢竟本病ガ毎ニ發作性ニ發現スルニアリ。サレバゴールド、シュミット氏ハ特ニ本症ニ對シ發作性加答兒性ナル名稱ヲ附與シ以テ慢性及ビ永續性ノモノヨリ抜擧セシナリ。後章病理ノ條下ニ敍說スルガ如ク發作ヲ誘發スルモノハ其原發性ナルト中毒性又ハ反射性ナルトヲ問ハズ要スルニ專ラ延髓ニ於ケル中樞呼吸、血管運動、分泌ノ異常刺激ニ基因スル事多數ノ學者ノ首肯スル所ナルガ、兎ニ角具體的ニ顯ハルル主ナル現象ハ呼吸性呼吸困難及ビ氣管枝加答兒ノ二者ニ過ギズ。然リ而シテ是等ノ兩症候ノ臨牀上ニ發現スル順序ニ二様ノ別アリテ或時ハ先ヅ加答兒ノ標徵ヲ示シ後若干ノ時ヲ經過シテ始メテ呼吸困難トナリ或時ハ反對ニ今迄自覺及ビ他覺的何等ノ加答兒性症候ナカリシモノニ突如呼吸困難襲撃シ後徐ロニ加答兒ノ確徵ヲ呈シ來ル之ニヨリ吾人ハ氣管枝炎性喘息ヲ更ニ二別シ前者ヲ加答兒性氣管枝喘息 (*A. bronchiale catarrhale*) 後者ヲ喘息性氣管枝加答兒 (*Bronchitis asthmica*) ト名ク蓋シ此區別



ハ理論上喘息ノ病因ヲ説クニ當リ關スル所頗ル重キヲ以テ一派ノ論者ニヨリ尊重セララルルノミナラズ實地治療上ニ於テモ影響スル所淺カラザルナリ。然レドモ日常吾人ガ病牀ニ患者ヲ訪フニ當リ果シテ兩者ノ孰レニ屬スベキヤヲ確診スル事ハ決シテ容易ノ業ニアラズ。概シテ之ヲ言ヘバ世上一般ニ前者ニ屬スルモノノ後者ニ比シ優ニ多數ナル事同日ノ論ニアラズ。某氏ノ蒐集セル統計ニ據レバ九〇%ハ幼時ヨリ易ク寒胃ニ侵サレ不絶鼻喉頭氣管及ビ氣管枝等ノ加答兒又ハ口峽炎等ニ罹ル傾向ヲ有シタル者ナリシト云フ。

余ハ本書ヲ編ムニ際シ原因、病理、豫後、診斷及ビ療法ハ各々章ヲ設ケテ記述スル事ト爲シタルモ獨リ一般ノ症候ニ就キテハ改メテ論說スルノ機會ナキヲ以テ左ニ其概略ヲ敘セン。尙ホ其詳細ニ互リテハ一般ノ内科書ニ讓ラント欲ス。尙ホ臨牀的徵候ハ種類ノ異ナルニ從ヒ自ヅト其經過ノ遲速難易自覺的及ビ他覺的ノ箇々ノ所見等ニツキ異同饒多タリ。這般ノモノハ各其條下ニ於テ特筆ノ勞ヲ惜マザル可シ。

本病ノ病牀的特色ハ發作性ニ現ハルル呼吸性呼吸困難ト急性肺氣腫及ビ

特殊ノ分泌ノ結果トシテ産スル所謂喘息痰ノ三ナリ。

而シテ固有ノ發作ニ先テ豫メ前驅症ノ現ハルル事屢目撃スル所ニシテ前ニ述ベタル癲癇性ノモノノ毫モ斯カル事ナク常ニ突然襲來スルニ比シ記憶ニ値スルモノナリ。然レドモ是等ノ前徵ハ毎ニ自覺的ノ訴ヲ起スモノニアラズ。而カモ彼ノ喘息性氣管枝加答兒ニアリテハ豫メ毫モ加答兒ノ存在スル事ナキヲ以テ全ク忽如現出スル事尠ナカラズ。通常前驅症トシテ數ヘラルルモノハ欠伸、噎氣、嘔吐、全身倦怠、前頭又ハ後頭ノ壓感、飢餓ノ感、喉頭又ハ腹胃内異常感、便通不整、鼓腸、多尿症、精神ノ興奮若クハ憂鬱又ハ輕微ノ惡寒感覺其他ノ自覺的ノモノノ外、加答兒性氣管枝喘息ニアリテハ未ダ發作ノ潜伏セル期間既ニ延長シ笛聲ヲ混ジタル呼吸音ヲ聽キ或ハ劇シキ涕瀾ヲ伴ヘル急性鼻加答兒ノ症狀ヲ呈シ結膜充血シテ流涙アリ。顔貌ハ沈衰シ涕瀾ノ多キヤ一時開數十枚ノ手巾ヲ濕ス事アリ。

通常發作ノ現ハルルヤ自覺的ニハ專ラ俄然タリ。自覺的及他覺的徵候ヲ較ブルニ前者ハ終始共ニ多クハ忽如トシテ到リ後者ハ兩期概ネ徐々タリ。殊ニ夜間午前一時前後ヨリ始マルモノ最多シト云フ。熟眠時ヲ侵スヤ患者ハ



頓ニ呼吸困難、胸内苦悶ノ感ヲ以テ醒覺シ、胸廓狹隘若クハ絞榨ノ感アリ。苦痛其極ニ達シ、患者自ラ窒息ノタメ斃ルルニ近キヲ覺悟スルヤ無意識ニ窓ニ馳セ、寒冷ナル空氣ニ觸レントシ、或ハ屢衣帶ヲ解キ、牀上ニ跪座シ以テ少シニテモ呼吸ヲ容易ナラシメン事ヲ圖ル。此際呼吸ヲ視レバ特異ナル呼吸氣性ニシテ、吸息モ稍緩慢トナルモ殊ニ顯著ナルハ、呼息ノ延長ナリ。如此呼吸徐々タルヲ以テ、勢一分時内ノ呼吸ノ頻度減少シ、甚敷ハ僅ニ十二回トナリ、多クモ二十四回ヲ超ユル事ナシ。而シテ副呼筋特ニ直腹筋、胸鎖乳頭筋等ハ盛ニ收縮シテ、呼息時板ノ如ク緊張シ、滿身冷汗ヲ以テ濕ホサレ、烈シキニ至レバ一乃至二分間肺ハ極度ノ吸氣位ニテ停止シ、其間知覺ヲ失ヒ屢失禁スルコトアリ。蓋シ其間モ脈膊ハ依然トシテ消失スル事ナク、而カモ多クハ其數増加シ、性小トナリ、張力モ亦減衰シ、皮膚ハ概ネ蒼白トナルモ決シテチアノ一ゼヲ呈スル事ナキヲ特色トス。體溫ハ一般ニ上昇スル事ナキヲ常規トスルモ稀ニハ三八度ニ達スル事アリ、然レドモ概シテ高熱ヲ發スル事ナク、而カモ今迄劇烈ナル呼吸困難アリシ場合ニアリテモ一朝他ニ何等カノ泉源アリテ三八度以上ノ發熱ヲ誘發スル時ハ呼吸ノ困難頓ニ歇ミ更ニ再ビ

體溫ノ復舊又ハ下降スルヲ待チテ再現スル事多シ。蓋シ小兒ノ喘息ニアリテハ往々非常ノ高熱ヲ伴フ事アリト云フ。

次デ自覺症狀トシテ前記ノ苦悶ノ外、往々胸筋、脊筋及ビ軀筋等ニ筋痛ヲ訴フル事アリ。特ニ横隔膜ノ附著部ニ劇烈ナル事多シ。此外頭痛及ビ腹部緊張ノ感ヲ患フルモノモ亦尠ナカラズ。蓋シ是等ノ苦痛ハ發作性喘息ニアリテハ初期一時間ニ於テ最強盛ニシテ時ノ進ムニ連レ消退シ行クヲ常トスルモ慢性及ビ永續性ノモノニアリテハ呼吸困難ノ増進ニ伴ヒ漸次頑固ト成行クモノナリ。

如此呼吸困難ハ自覺的及ビ他覺的ニ互ニ相隨伴シテ起ルト雖モ稀ニハ全ク相離レテ現ハルル事アリ。特ニ小兒ニアリテハ他覺上非常ノ呼吸促進ヲ呈セル際ニアリテモ患者ハ自若トシテ更ニ何等ノ苦痛ヲ表サザル事往々目撃セララル所トス。

尙ホ他覺的症狀ヲ稍詳細ニ互リテ敘述スレバ左ノ如シ。  
視診スルニ胸部ノ運動一般ニ微弱ニシテ横隔膜ハ下降シ助間腔ハ廣ク且ツ膨隆ス。然レドモX光線徹照法ニヨルニ此際尙ホ横隔膜ノ運動ヲ認ム(病



理ノ條下ウ<sup>ン</sup>トリッヒ氏等ノ說參照此外タルマ氏ハ喉頭鏡ニヨリ聲帶ノ運動極メテ不正ナルヲ證明シタリト云フ。

觸診スルニ胸部ニハ特殊ノ變化ナク唯咿軋性及ビ笛性雜音ノ氣管枝震顫トナリテ觸ルルアルノミ。聲音震顫ハ空氣波動ノ喉頭ヨリ氣管枝ヲ經テ胸壁ニ傳達スルニ當リ妨害ヲ蒙ルガ爲メ著シク減弱セルヲ常トス。

打診ハ屢頗ル明瞭ニシテ低ク且ツ鼓音ヲ帶ブルヲ特色トス。是レ肺組織ノ過度ニ緊張セルニ據ルモノニシテ恰モ紙匣ヲ敲打スルガ如キヲ以テビールメル氏ハ之ニ名クルニ匣音 (Schneker-ton) ヲ以テシタリ。此他心濁音界ハ著シク縮小シ甚シキニ至リテハ全ク消失スル事アリ。且ツ肝臟ハ下降シ肺ノ下縁及ビ前内縁ハ下方及ビ内方ニ轉移シテ呼吸的移動極メテ幽微ナルヲ例トス。

聽診セバ前述セルガ如ク著シキ呼吸延長ト笛聲及ビ種々ノ乾性囉音ヲ聽ク而カモ這般ノ症候ハ往々ニシテ數室ヲ隔テテ聽取シ得ル事アリ。蓋シ肺胞呼吸音ハ潜匿シ居ルヲ例規トス。氣管枝聲モ亦微弱トナリ音聲亦低ク嘶啞シ時ニハ全ク無音ニテ科話ヲ用フル事アリ。

以上諸多ノ症候アリト雖モ是等ハ要スルニ肺氣腫及ビ氣管枝加答兒並ニ喘息ニ固有ナル急性氣管枝狹窄ニヨリテ容易ニ説明シ得ル處ナリ。

而シテ喘息發作ノ持續時間及ビ頻疎ハ種類ニヨリ相違アルノミナラズ同一ノ患者ニアリテモ極メテ不定ナリ。持續ノ短キハ僅ニ一二時間ニ過ギザルモ長キハ數月ニ亙ル事アリ。然レドモ一般ニ二週ヲ超過セシ例ハ極メテ稀有ニ屬スト云フ。又發作ノ頻々襲來スルモノニアリテハ一日數回ノ多キニ及ビ其稀疎ナルモノニアリテハ數月乃至數年間僅ニ一回ノ發作ノ現ハルルモノアリト云フ。

一回ノ發作ノ終ラントスルヤ癩痲性ノモノニアリテハ矢張俄然タルモ他ノモノニ於テハ概ネ徐々ニシテ囉音ハ次第ニ其響ヲ失ヒテ鈍ク且ツ低ク加フルニ濕性ヲ帶ビ來リ呼吸困難ハ漸次減退シ筋張筋痛モ亦減殺サレ却テ發作旺盛ノ時代ニアリテ極メテ微々タリシ咳嗽愈頻繁トナリ祛痰力ノ増進ニ伴ヒ少量ノ極メテ粘稠力ニ富ミタル灰白色ノ痰ヲ咯出ス。此咯痰タルヤ往々粘靱ナルコト恰カモ膠ノ如ク殆ント刀ヲ用ヒザレバ切斷シ得ザルハ特徴アルハミナラズ後章病理ノ條下ニ論載セル有名ナルクルシマン



氏螺旋狀體及、ライデン氏喘息結晶及、エオジン細胞等ハ貴重ナル診斷上ノ羅針盤ハ實ニ此内ニ包藏サレ居レリ。

血液ハ發作時ニ於テ白血球ニ多少ノ増加アリ。特ニエオジン細胞ニ富ム事稀ナラズ。蓋シゴールド、シュミット氏ニ據ル時ハ外見上著明ナル貧血アルガ如キ際ト雖モ血液内ノ血色素ノ量ハ著シキ減少ヲ認メズト云フ。尙ホ「ハンス、シュミット」氏ニ據レバ小兒ニアリテハ發作時往々尿中ニ「アセトン」及ビ「アセト」錯酸ヲ證明スル事屢ナリト。

### 三 慢性加答兒性喘息 Asthma catarrhale chronicum

發作性喘息ガ數年ノ久シキニ互リ反復起伏スル時ハ遂ニ往々本症ニ移行スル事アリ。此種類ニアリテハ喘息ハ殆ンド全ク一時的ノ發作性ヲ失ヒ病時平時共ニ時續時間著シク延長シ往々數月ニ渉ル呼吸困難アリテ其後全ク身體ニ何等ノ自訴ナキ期間モ亦數月ニ及ブモノナリ。サレバ此場合ニアリテハ寧ロ續發性喘息頻發症(STATUS asthmaticus)ト名クルヲ至當トス。而シテ呼吸困難ノ出現セル時期ニ於テ仔細ニ之ヲ觀察セバ此際モ同ジク

呼吸性ニシテ加答兒及ビ急性肺腫並ニ獨特ナル咯痰ノ存在スル事毫モ通常性喘息ト擇ブ事ナシ。然リ而シテ如此長期ノ發作ハ優ニ數旬ヲ經過シ得ルト雖ドモ其間往々數回ノ輕快時期及ビ眞ニ發作狀ニ症候ノ劇増ヲ見ル事アリテ靜養旬日ヲ積メバ殆ンド何等ノ苦痛ナク祛痰力モ旺盛ニシテ通常ノ氣管枝加答兒ト區別シ得ザルニ至リ又若シ攝養ヲ怠ランカ忽チニシテ瑣細ノ原因ニヨリ頓ニ症候猛烈トナリ非常ノ苦痛ヲ招クニ至ル。然レドモ一朝休止期ニ復センカ數月ノ久シキ患者ハ寸毫ノ訴ダニ有セズ他覺的ニモ加答兒及ビ氣腫ノ徵候悉皆消散シ其痕跡ダニ留メザルヲ定規トス。多年斯カル慢性加答兒性喘息ノ出沒スルヤ漸次症候頑固トナリ來リ發作ノ頻度徐ロニ頻繁トナルノミナラズ一回ノ持續時間モ亦延長シ遂ニ往々ニシテ永續性ノモノニ移行スルモノナリ。然レドモ又稀ニハ初メ確ニ慢性ノ經過ヲ取リシモノニシテ後來眞ノ發作性ニ移行セシ例アリ。

### 四 永續性加答兒性喘息 Asthma catarrhale permanentis

是慢性加答兒性喘息ノ更ニ一步ヲ進メタルモノニシテ此場合ニアリテハ



呼吸ノ困難全ク發作性ノ性質ヲ失ヒ朝夕四時殆ド休止スル所ヲ知ラズ而カモ歩行又ハ其他劇シキ筋肉運動ノ後ニアリテハ彼ノ發作性ノモノニ劣ラザル重症ノ襲フアリテ患者ノ不絶苦悶ニ腦ム事之ヨリ大ナルハナシ然レドモ其間尙ホ多少ノ輕快時期ハ存在シ特ニ嚴密ナル安靜ヲ守リ而モ氣温適和ナル時季ニアリテハ呼吸ノ稍健康時ノ常態ニ近ケルヲ欣ブ事アリ此ノ如ク症候ニ多少ノ消長アリト雖モ而カモ喘息ノ全ク消滅スル時期ナキヲ以テ肺氣腫モ亦他ノ種類ニ於テ看ルガ如ク全然其跡ヲ絶ツノ餘裕ヲ有セズ次第ニ歳ノ老ユルニ從ヒ組織ノ緊張力著シク衰微シ終ニ眞性肺氣腫ニ移行スルモノナリ而シテ斯ク所謂眞ノ喘息トナリシ時代ニ至レバ過去數十年連綿患者ヲ苦メタル息喘性呼吸困難ノ攻撃ハ最早勃興シ得ベキ能力ヲ有セズ換言スレバ喘息去リテ眞性肺氣腫代ツテ來ル事ハゴールド・シムミット氏等ノ主張スル所ニシテ其理由トシテ或ハ氣道粘膜ノ老衰的萎縮ニ歸シ或ハ氣管枝筋ノ廢滅ニ歸シ或ハ該筋ノ麻痺ヲ以テス尙ホ眞性ノ肺氣腫ニテ間ニ喘息ニ酷似セル呼吸困難ヲ惹起スル事アルヲ以テ診斷上ニハ餘程ノ注意ヲ要ス(後章診條下參照)。

### 五 精神性又ハ感應性喘息

*Asthma psychicum s. suggestivum.*

是レ眞ノ喘息ニ算スベキモノニ非ズト雖モ發作ノ状態極メテ彼ト酷似セルヲ以テ左ニゴールド・シムミット氏ノ數例ヲ擧ゲ其大様ヲ指示スル事トセリ。抑々吾人ノ營ム呼吸運動ナルモノハ精神作用ニヨリ容易ニ影響サル、事ハ吾等ノ日常經驗セル所ニシテ特ニ神經過敏ナルモノニアリテハ喜怒哀樂ノ感極マレバ往々ニシテ呼吸ノ促進ヲ訴フ。況ンヤ精神上既ニ缺損アルモノニ於テハ夫等ノ感動常規ヲ脱シ些細ノ原因尙ホ良ク激烈ナル精神興奮ヲ促シ屢單純ナル呼吸ノ促進ニ加フルニ喘息の發作ヲ以テスル者アリ。是レ即チ茲ニ記述スル精神性喘息ニシテ發作ノ徵候極メテ眞ノ喘息ニ髣髴タリ。然レドモ兩者間ノ著シキ差違ハ本來精神性喘息ハ如此精神異常ニ基因スルモノナルヲ以テ普通喘息ノ發作ニ用ヒ著效ヲ奏スル藥品等ノ往住ニシテ本病ニ應用シテ失敗スルニ反シ全ク無意味ナル藥劑又ハ催眠術或ハ單ニ精神感應作用等ノ奇效ヲ表シ而カモ其奏效スルヤ極メテ迅速ニシテ一箇ノ蒸餾水ノ注入頓ニ凡テノ苦悶ヲ拭ヒ去リ得ル等ノ事アリテ何



處迄モ歇斯的里的ノ性質ヲ具備シ居レリ。

第一例ハ十六歳ノ處女ニシテ家族ニハ他ニ現在喘息ヲ患フル者多シ其既往ヲ尋ヌルニ生來至テ神經質ニシテ一年前始メテ喘息ノ極侵ニ遭ヒヌ而シテ此時以來歇斯的里的ノ性質俄然増進シ特ニ寒冒ニ對シ非常ナル恐怖ノ念ヲ懷抱スルニ至リ寸時モ精神ノ安靜ヲ許サズ彼女ガ一度發作ヲ起スヤ呼吸困難ノ状態モ眞ノ喘息ト差異アルヲ認メズト雖モ只著シク相違セルハ苦悶其極ニ達シタル時ト雖モ主治醫ノ病室ニ入り來ルアラバ忽如トシテ歇ミ醫師ノ去ルヤ再ビ幾時ナラズシテ病態ニ復シ毎ニ發作ハ醫師ノ存否ニヨリ出沒ス尙ホ本患者ニ於テ稍趣ヲ異ニセルハ發作時ニ於ケル聽診所見ニシテ通常ノ如ク全肺ニ互リテ延長セル笛聲呼氣音ヲ聽ク事ナク僅ニ左上葉ニ於テノミ證明シ得ルノミ。

第二例ハ生來全ク健康ナリシガ某日親戚者ニテ現ニ劇シキ喘息ニ惱メルモノヲ彼ノ病牀ニ訪レタルニ其日ヨリ俄然喘息患者ニ化シ爾來起伏スル發作ノ犠牲トナレリ臨牀上ノ所見ハ本文ノ如シ。

第三例ノ處女ハ日々少量ノ沃度加里ヲ内服スル事ニヨリ喘息ヲ未發ニ防

ギ得ルモノナルガ一日タリトモ之ヲ怠ラバ忽チ發作ノ襲フ所トナリ此時直ニ少量ノ沃剝ヲ投與セバ十五分ヲ待タズシテ頓ニ鎮靜スルヲ常トス。第四例ハ老イタル喘息患者ナルガ毎ニ降雨ノ前必ズ發作ヲ表ハス者ナリ其他斯カル例ハ多クノ學者ニヨリ屢々報告サレ居レリ。

### 第三 喘息ノ原因

遺傳 喘息ハ恰カモ肺結核ニ於ケルガ如ク全ク先天的素因ヲ有セザル者ヲ犯ス事アリト雖モ又往々ニシテ之ヲ證明シ得ルモノナリ蓋シ斯カルモノニアリテハ時ニ喘息夫レ自身ノ遺傳ヲ見ルモ特ニ著明ナルハ喘息ノ發生ヲ促スベキ神經素質ノ遺傳ニシテ神經系ノ如何ニ本病ノ發生ニ與テ力アルカハ中心性神經病ノタメニ往々喘息ヲ挑發スル事アルヲ見テモ明ナリ。

今ゴールド、シュミット氏ノ統計ヲ觀ルニ患者百名中父母兄弟親戚ノ孰レカニ喘息ヲ患フル者ヲ有セル患者四十名ノ多キニ達シ近キ血縁ニ癩癩患者ノアルモノ八名同一患者ニシテ喘息ト癩癩ヲ併患セルモノ二名ナリ又兩親



孰レカニ偏頭痛ヲ訴フルモノハ優ニ九〇%ナリト云フ。此外若干數ニ於テハ父母ニ眞正ノ精神病ヲ思フルモノアリシトゾ。以テ如何ニ神經素質ノ喘息ニ密接ナル關係アルカラ推知スルニ足ラン。

予ハ讀者ノ好奇心ニ訴ヘンガ爲メゴールド、シュミット氏ノ奇異ナル二例ヲ示サン。

第一例ハ十八歳ニシテ寒冒後始メテ喘息ノ襲撃ニ遭ヒテヨリ爾來發作ノ出沒極リナク而カモ各發作時ノ苦痛難耐ヲ以テ毎ニ醫師ニ乞フテ莫爾比涅ノ注射ヲ受ケタル結果トシテ晩年其中毒ニ陥リタリ。五十五歳ニシテ多年ノ宿痾ナル喘息ハ終ニ發作性ヲ失ヒテ持續性トナリ閒隙ナク患者ヲ惱マセシガ六十五歳ニシテ心臟病ノ侵ス所トナリ遂ニ不歸ノ客トナレリ。今此患者ノ家族的既往症ヲ尋ヌルニ父ハ彼ノ中年以後精神ニ異狀ヲ呈シ爲メニ相當ノ業務ニ服スルノ能ヲ失ヒ零落ノ果、乞丐トナリ悲惨ナル生ヲ送りタルモノ、母モ亦精神常規ヲ脱シ居タルガ如ク瑣細ナル動機ニヨリ多クノ可憐ナル子供ヲ遺シテ自ラ破鏡シ生涯彼等ヲ顧ミル事ヲ知ラザリシ冷酷極リナキモノナリキ。患者ニハ同胞五名アリ。第一ノ男子ハ齡三十二ニシ

テ癲癩ニテ斃レ第二ハ患者ニシテ喘息ヲ患ヘ第三ハ道義心ニ缺ゲタル不正ナル商人第四ハ先天性癡呆ノ女子第五ノミハ獨心身ニ何等ノ異常ヲ認メ得ザル健全ナル女子ナリシト云フ。此外彼ノ親戚中ニハ爾餘ノ精神疾患ニ罹リタル者モ亦尠ナカラザリシトゾ。

第二例ハ五十一歳ノ歇斯的里性ノ婦人ナリ。六歳ノ時ニ已ニ喘息患者ノ群ニ投ズ。彼女ノ家系ヲ尋ヌルニ父方ノ祖父ハ一種ノ精神症ヲ患ヘ終ニ追跡妄想ノ爲メ自刃ス。父ハ患者ノ呱呱ノ聲ヲ擧ゲザル前、微毒ニ罹リ居タリシガ六十二歳ニシテ糖尿病ノ爲メニ斃ル。母ハ齡古稀ニ達シ得タルモ壯年時良夫ノ微毒ニ感染シ居タルタメ晩年身體ノ諸部ニ麻痺ヲ訴ヘタリ。同胞四名アリ。孰レモ酒精中毒ニテ斃ル。尙ホ患者不幸ニシテ三人ノ夫ニ嫁シタルガ其第一ハ進行性麻痺症ニテ逝キ第二ハ自刃ス。且ツ先ノ夫トノ間ニ産ミタル子女三名悉ク精神異常ヲ呈シタリト云フ。

要言スレバ喘息ハ往々ニシテ好シテ神經疾患ニ犯サレ易キ家族ヲ襲フ事ハ争ヒ難キ事實ナリ。而カモ患者自身ニ於テモ屢々精神作用ノ常人ト異リタル者アルヲ認ム例之或種ノ食物ニ對シ絶對的嫌忌心ヲ懷ク者、些細ノ理由



ニヨリ過度ノ興奮ヲナス者皮膚ノ知覺極メテ過敏ニシテ通風ニ觸レテ容易ニ疼痛ヲ訴フル者、跣足土地ヲ踏ム事ニヨリ發作性噴嚏ヲ惹起スル者、輕ク皮膚ヲ刺戟スル事ニヨリ暗赤色ノ丘疹ヲ生ズル者、皮膚病特ニ濕疹ニ侵サレ易キ者、昆蟲ノ穿刺ニヨリ伸展セル皮膚ノ炎症ヲ發スル者、或ハ認知スベキ何等ノ原因ノ存スル事ナクシテ忽然劇烈ナル鼻漏、聲咳、咳嗽ヲ訴フル者ノ如シ、如斯素因ノ有無ハ實ニ同一ノ原因ニ遭遇スルモ甲ハ忽チ喘息ノ襲來ニ遭ヒテ陷落シ乙ハ頑強ニ抵抗シ得ル等ノ懸隔ヲ生ズル所以ナリ。

性ノ影響ニ就テハ古來サルター氏ノ統計(百五十三名中百〇二人ハ男子ニシテ五十一人ハ女子ナリ)ニ基キ婦人ヨリモ男子ニ多シトセシガ最近ゴールド、シュミット氏ノ蒐集セル統計ニテハ女子ノ男子ヨリ多キ事其比六十五ニ對スル三十五ナリ、尙ホアイヒホルスト氏ハ一般ニハ男子ニ多キモ三代ニハ寧ロ女子ニ多シト云ヘリ。

年齢ハ最多ク頻發スルヲ壯年時代トス、然レトモ例外トシテハ四十歳以後始メテ現ハル、事アリ、或ハ已ニ哺乳兒ヲ襲フ事アリ、(サルター氏ノ統計ハ大多數十歳以下ニ始マリタリト)

境遇ト職業 モ亦多少ノ關係アリ、一般ニ貧民ヨリハ富者ニ多ク、居常多辯ヲ要スル職業ニ多シト云フ。

寒冒及寒冷刺戟 臨牀上喘息ノ發作ハ寒冷ノ氣候ニ於テ起ル事頻繁ニ、溫和ノ氣節ニハ患者ノ若悶ヲ訴フル事尠キ事及ビ發作ニ先チテ良モスレバ眞性ノ寒冒ヲ見ル等ノ事實ニ徴シ且ツ理論上ニ於テモ寒冷刺戟ハ知覺及ビ分泌等ノ神經作用ニ影響スル事大ナルヨリ想ヘバ寒氣及ビ其結果トシテ現ハル、寒冒ノ如何ニ喘息ト密接ナル關係アルカヲ察知スル事難カラズト雖モ而カモ吾人ハ未ダ果シテ如何ナル程度迄原因の價値アルカヲ確說シ得ザルヲ憾ム。

天候 ノ如何モ亦忽ニスベキニアラズ、往々不良ナル天候ノ直前又ハ其期閉不快ノ感ヲ覺ユルモノアリ、又屢、發作ヲ起スモノサヘアリ、如此ハ畢竟空氣ノ濕潤ニ基因スベシト雖モ稀ニハ又空氣ノ異常ニ乾燥セルト及ビ其塵埃ニ富メルトニヨリ著シク患者ノ苦悶ヲ増進セシムル事アリ、サレバ喘息ノ原因の關係ヲ論ズルニ當リテハ單ニ空氣ノ乾濕ノミナラズ其異常成分ノ如何及ビ溫度ノ高低等諸種ノ點ニ就キ配慮スベキモノ多クアルベキモ



未ダ充分ナル探究ナキモノ、如シ。  
 地理的關係 喘息ガ一定ノ地方ニ多ク一定ノ地域ニ乏シキ事アルコトハ夙ニ識者ノ注意ヲ牽キタル所ニシテ幾多ノ學者ハ或ハ土地ノ高低ニヨリ（療法ノ條下參照）或ハ海岸ヨリ隔タル事ノ遠近ニヨリ或ハ表理ノ平原ナルト丘陵ニ富ムトニヨリ種々ノ假説ヲ設ケテ説明ヲ試ミタルモ未ダ的確ナル結論ニ到達セズ蓋シ一般ニ熱帶及ビ溫帶ニテモ氣溫高キ地方ハ寒帶ニ比シ多クノ患者ヲ産スル事ハ事實ナルガ如シト云フ。ゴールド、シュミット氏ニ據レバ泰西ニテ秀テテ多クノ喘息患者ヲ出スヲ埃及トス。此外同一ノ地方ニアリテモ其内ノ一小區域ヲ限リテ特ニ喘息ニ富メル事アリ或ハ特ニ本病ニ免疫サレタルノ觀ヲ呈スル事モアリトゾ。尙ホ稀有ノ事實トシテ發作ノ起狀ト地理的關係トノ間ニ極メテ奇異ナル連鎖アル事アリ。今一二ノ奇例ヲ示サン。

第一例ハ四十歳ノ軍人ノ妻ニシテ二十餘年ノ久シキ慢性加答兒性喘息ヲ患ヘ居タルガ某年良人ノ公命ニヨリアバシニアニ駐屯スルニ遇ヒ相伴ハレテ彼地ニ起キ二年有六月ヲ過シタリ。然ルニ可驚其期間サシモ頑強ナリシ

喘息頓ニ消散シ二年餘ニ互リ僅ニ一回ノ發作ダニ起ラズ始メテ愁眉ヲ開クヲ得タリ然レドモ後再び其地ヲ去ルヤ一度退散セシ喘息兵ヲ修メ猛然逆襲シ來リ爾來依然トシテ昔日ノ病體ニ復シ劇烈ナル發作ノ奴隸トナリタリト云フ。

第二例ハ二十五歳ノ海軍々人ニシテ多年喘息ヲ患ヘタルガ彼ニ於テ特有ナリシハ彼ガ艦船ニ乗ジ航海ニ從事スル間ハ殆ド何等ノ訴フル所ナシト雖モ一朝上陸セシカ忽チニシテ發作襲來シ再び船中ニ歸ルヤ喘息モ亦頓ニ治癒シタリト云フ。

其他類似ノ奇例尠ナカラズト雖モ煩ハシケレバ記サズ。  
 全身病 ニシテ喘息ヲ誘發シ得ルモノアリヤ否ニ就キテハ未ダ詳カナラズ。然レドモ既往又ハ現在ニアリテ微毒結核、狗僂病、腺病乃至貧血ノ如キモノヲ證明スル事ハ必ズシモ稀有ニアラズ。然レドモ其原因的價値ニ至リテハ確證ナキ事論ヲ須ヒズ。尙ホ古來喘息患者ニシテ同時ニ結核ヲ患フルモノ或ハ結核患者ニシテ後來喘息ヲ併發スル等ノ例ハ極メテ稀ナリトノ統計ニ基キ結核ト喘息ハ互ニ相排斥スルモノナリトノ説ヲナスモノアリ。



リューゲル氏等ツルバレ及ビスペンゲル氏一九〇六ハ蒐集セル統計ニ於テ百四十三例ノ喘息患者中結核ヲ併患セルモノ優ニ六十八例ニ達シタルヲ以テ此說ニ反對シタルガ最近ゴールド、シュミット氏ハ前說ニ左袒セリ。但シ彼ノ臨牀的經驗ニヨレバ喘息患者ニシテ結核ヲ有スルモノハ僅ニ〇・五%ナリト云フ。要スルニ今日尙ホ正確ナル斷案ヲ下シ得ザルガ如シ。

精神的感動　モ亦屢、喘息ヲ誘導スル事前述ノ如シ特ニ精神性喘息ニ於テ著例ヲ見ル。

此外奇態ナルモノトシテ人工ノ薔薇花ヲ視ル事ニヨリ又ハ青色ノ衣服ヲ纏フ事ニヨリ發作ヲ挑發セシ例アリ。此外旅行ニヨリ或ハ慣レザル寢牀ニ臥ス事ニヨリ或ハ他人ノ居室ニ入ル事ニヨリ或ハ特殊ノ嗅覺ニヨリ發作ノ毎ニ襲來スルモノアリ。如此事實ハ報告枚舉ニ遑アラズ。但シ這般ノ大多數ハ患者ノ歇斯的里ニ基因セル事明白ナルモ中ニハ全ク化學的刺戟ニ歸セシムベキモノ亦存在シ得ベシ。

米人サルター氏ノ唱ヘタル所謂猫喘息 (Salter'sche sog. Katzenasthma) モ亦茲ニ記述セザルベカラズ。是レサルター氏ガ蒐集セル無數ノ喘息患者中一二

ノ不思議ナル者アリ。是等ノ患者ハ猫ニ近寄ル毎ニ喘息發作ヲ起スヲ常トシタリ。而シテサルター氏ハ其源ノ那邊ニアルカニ就キ説キテ曰ク「是レ猫ノ毛皮ヨリ一種ノ揮發性物質空中ニ飛散シ患者ノ之ヲ吸入スル事ニヨリ化學的ノ刺戟ヲ受ケ以テ發作ヲ挑發スルモノナリ」ト。而カモ氏ハ自己ノ說ヲ證明セント欲シ豫メ小房ニ猫毛ヲ數多飛散セシメ置キ然ル後、彼自ラ其室ニ入りタルニ暫時ニシテ喘息樣發作ヲ來シタリト云フ。其後同一ノ實驗ノ他ノ學者ニヨリテ報告サレタルモノナキヲ以テ直ニ此說ヲ非認スル事能ハザレドモ兎ニ角精神性喘息ニハ諸種ノ奇怪ナル現象アリテ而カモ實例トシテ單ニ猫ノ叫聲ヲ聞キ或ハ僅ニ猫ヲ一瞥スルノミニヨリ一種不快ノ感ヲ覺エ稀ニハ眞性ノ發作ヲ惹起スモノサヘアリト云ヘバサルター氏ノモノモ或ハ此種ノ精神性喘息ニアラザルナキヲ保シ難カルベシ。

局所的疾患　ニ鎖繫シテ喘息ノ發スル事ハ明白ナル事實ニシテ所謂續發性、或ハ症候的、喘息 (Secundäre od. symptomatische Asthma) 卽チ是ナリ此症ハ末梢神經刺戟セラレ次デ其刺戟球中樞ニ波及シテ此處ヨリ反射的ニ喘息ヲ挑發スルモノ最多シト説明サレ從テ別名ヲ反射性喘息 (Asthma reflexum) ト云ヒ



實地臨牀上ニ於テモ這般ノ原因的疾患ト見做サレタルモノ、適當ナル治療法ニヨリ又ハ自然ニ平癒スル時ハ忽如トシテ喘息ノ消滅シ其痕ヲ留メザル事屢ナリト雖モ毎回必ズシモ然ルニアラズ。隨テ其性質遂ニ不明ニ歸スル場合稀ナリトセズ。

這般ノ疾患中特ニ多クノ注意ヲ牽ケルヲ鼻腔及ビ鼻咽腔ノ疾患(知覺過敏加答兒粘膜炎、下甲介肥大、鼻茸、中隔屈曲、腺狀組織肥大症、扁桃腺肥大症等)トス。此他氣管枝加答兒病理ノ條下參照腸胃ノ疾病、婦人生殖器疾患、月經、妊娠、產褥又ハ男子ニ於ケル精液漏、慢性疥癩其他諸多ノ皮膚病、匂行疹、蕁麻疹、濕疹等ニ伴發スルハ屢、實驗サレタル所ナリ。

中毒性喘息 (Asthma toxicum) ト名ケラレタルハ格魯兒、鉛、水銀等ノ藥品ヲ内服スル事ニヨリテ起ル喘息ノ謂ニシテホフマン氏ノ如キハ之ヲ否認シタルモ他方ニハ經驗上ノ確信ヲ懷ケルモノモ少ナカラス。蓋シ其病理ハ這般ノ毒物ニヨリテ球中樞ノ官能紊亂ニ歸セシメントス。

尙ホ肥胖病、痛風及ビ糖尿病ノ如キ新陳代謝病又ハ尿毒症、癩腫等ノ際自體中毒性喘息ヲ起ストノ説モ現今疑惑ノ裡ニ葬リ去ラレントス。

## 第四 喘息ノ病理

### 一 剖 檢

本病ニハ要スルニ固有ナル剖檢的所見ナシ。隨テ故ラニ縷述ノ要ヲ認メズ。現今ニ至ル迄眞ノ喘息ニテ剖檢セラレタル記錄ヲ徵スル毎ニ主ナル變化ハ氣管枝粘膜炎、炎症ト其產物、肺氣腫及ビ心臟擴張、腎炎等ノ時ニ目撃サルルノミニテ孰モ寧ロ續發性ノ所見ナリ。

今ゴールド、シユミット氏ガ著書「アストマ」ニ過去ニ於ケル明ナル喘息剖檢記錄トシテ抜摘記述セルハ左ノ五例ナリ。特志ノ士ハ須ク原書ニ就テ研究アラシム事ヲ乞フ。

1. Leyden, 40. j. ♀ (Vortrag, gehalten von der mji für-

aerzlichen Gesellschaft, Berl. 1886, s. 13)

2. Berkast, 37. j. ♀ (On Bronchialasthmatis

pathology and treatment, London 1887)



- 3. A. Schmidt (Zeitschr. f. kl. Med., Berl. 1892)
- 4. A. Frankel, 63. j. ♂ (Zeitschr. f. kl. Med., Berl. 1898)
- 5. " 48. j. ♂ (Deutsch. Med. Wochenschr., 1900)

## 二 喘息痰ノ主要成分

喘息痰ヲ構成セル成分種々アリト雖モ肝要ナルハライデン氏喘息結晶、クルシマン氏螺旋狀體及ビエオジン細胞ノ三者ナル事前述ノ如シ但シ這般ノ物體ニ關シテハ世上一般ニ行ハレタル内科書及ビ病理學書ニ懇切ナル記載アルヲ以テ余ハ敢テ贅言ヲ過サズ唯簡單ニ是等ノ物ノ意味及ビ由來ニ就キ一言セン。

ライデン氏喘息結晶 Leyden'sche Asthma-kristalle ハ西曆一千八百八十年ライデン氏ノ創メテ發見セル六面形重稜體ニシテライデン氏ハ該結晶ハ先ヅ血液内ニテ生ジ然ル後ニ滲出物トシテ氣管枝腔内ニ排出サル、モノトシ而カモ喘息ノ發作ハ其尖銳ナル結晶角ニヨリテ氣管枝粘膜ノ刺戟セラル、ガ爲メナリト論ジタリ然レドモ其後ノ研究ニヨリテ氣管枝腔内ノ分泌物内

ニ明ニ該結晶ヲ證明シ得ルモノニシテ一回ダニ喘息様發作ヲ起サザルモノアルヲ知リ且ツ喘息ノミナラズ爾餘ノ疾患ニ於テモ屢々證明サル、ニ至リタルヲ以テライデン氏ノ説ハ今ヤ單ニ歴史的ノ價值ヲ有スルノミニシテ現今ニテハ該結晶ノ滯溜サレシ氣管枝内分泌物ヨリ生ズルモノナル事ヲ疑フ餘地ヲ有セズ果シテ然ラバ氣管枝内容物中ノ如何ナルモノヨリ發生スルカニ就キテハ或ハ圓形細胞トシ(ウングール氏)或ハ細胞ノ崩壞物ヨリトシ(オエルテル氏)或ハ螺旋狀體ヨリトシ(パテルラ氏)古來異説紛々タルモ要スルニ現今ニテハゴルラッシュ氏ノ「エオジン」細胞ニ由來セリトノ説最有力ナルモノ、如シ又該結晶ノ化學的成分ニ就キテモ或ハ「チロジン」トシ又ハ粘液素様ノモノナリトシ(輓近グムブレヒト氏)ハ畢竟蛋白質ニ外ナラザルヲ表明セリ。

クルシマン氏螺旋狀體 *Urschmann'sche Asthma spirallan* ハライデン氏ノ喘息結晶發見後幾程モナククルシマン氏ニヨリテ創メテ記載サレタル灰白黃色ノ螺旋狀纖維ニシテ周緣重複シ中央ニ一本ノ光輝アル軸索ヲ藏セリ而シテ發見ノ當時ニアリテハクルシマン氏ハ本體ヲ以テ喘息ニ固有ノ物ト



シタルモ後喘息以外ノ呼吸器疾患特ニ纖維素性肺炎乃至氣管枝加答兒等ノ略疾中ニモ證明サルルニ至リヌ。而シテ其發生ノ由來ニ就キテモ諸説アリト雖ドモ要スルニゲルラッハ氏ノ試験及ビフレンケル氏ノ剖檢報告ニヨリ明ナルガ如ク強盛ナル外壓ニ基因スルモノニシテ喘息ノ發作ニ際シテハ氣管枝ノ内壓非常ニ増激スルヲ以テ容易ニ産出サルルトノ説最モ妥當ナルガ如シ。然リ而シテ其成分ノ如何ニ關シテハ今尙ホ異議アリ。アードルブ、シム、ハント氏 (Zeitschr. f. kl. Med., Berl. 1892) ハ「ムチーン」ナリトシフレンケル氏 (Zeitsch. f. kl. Med., Berl. 1898. u. Deutsch. Med. Wochenschr. 1900) モ亦之ニ贊シバカスト氏ハ上皮細胞ノ誘導體トシ即チ末梢氣管枝狹窄ノタメ管壁互ニ相接近シテ呼吸ノ都度相摩擦シ以テ斯カル螺旋體ヲ製出スルトス。此他ライデン氏ハ纖維素ヨリ成ルトシクルシュマン氏ハ是レ畢竟滲出性氣管枝加答兒ノ産物ナリトシ又レーブキー氏ハ剝離性加答兒ニ歸セシメ同氏ハ二十六例ノ剖檢ニヨリ學ビ得タル所ヲ以テ喘息ヲ二期ニ分チ第一期ヲ上皮加答兒第二期ヲ剝離期トセリ。ロイバニー氏ハ一部ハ粘液素他部ハ纖維素ヨリ成ルモノトセリ。此他軸索ノ本態ニ關シテモ諸説アリテ或ハ單ニ空虚タル

ノミトスルモ其實シムミット氏ノ評論セシガ如ク實質性ノ中軸纖維ニシテ螺旋體ノ骨格ヲ形成シ外部ノ皮膚ハ寧ロ後其表面ニ漸次附著セシモノトスル方正鶴ヲ得タルニ近カラシカ。

「エオジン」細胞。eosinophile Zellen ハ喘息ニアリテハ管ニ其略痰内ノミナラズ血液中ニモ存在スルモノニシテ創メテ之ヲ指摘シタルヲミューレル氏トス。然レドモ該細胞モ勿論喘息ニ固有ノモノニアラズシテ他ノ氣管枝疾患ノ痰中ニモ往々證明シ得ルモノナリ。而シテ其發生ノ理由及意味ニ就キテハ現今尙ホ確説ナキヲ遺憾トス。是等三種ノ外略痰内ニ於テ他ノ結晶體ウンガール氏尿酸石灰結晶レウキ一氏酸性磷酸石灰結晶等及ビ諸多ノ細胞等ニ就キ種々ノ議論アレドモ故ラニ茲ニ贅セズ。

### 三 喘息ノ本態

喘息ノ本態ニ就キテハ古來幾多ノ異説アリ。而カモ現今尙ホ定説ナシト雖ドモ大別シテ純氣管枝炎性説純神經説及ビ拆衷説ノ三種トス。



創メテ純氣管枝炎性説ヲ説ヘタルハトラヴベー氏 (Carrhus anthusmia) ナル  
 モ之ヲシテ眞ニ有力ナル學説タラシメ以テ江湖ノ注目ヲ惹ケルハ有名ナ  
 ルクルシユマン氏ニシテ渠ハ喘息ノ本態ヲシテ徹頭徹尾急性細氣管枝加  
 答兒ニ歸セシメタリ。而シテステルク及ビウエーベル氏等ハ喘息ヲシテ炎  
 性ノモノタラシメズ畢竟其本態ハ單純ナル急性ノ充血ナリト論ジヌ。然レド  
 モ後説ハトラウベー氏ノ實驗セル如ク喉頭鏡下明ニ充血ヲ證明スル際ニ  
 アリテモ喘息ハ容易ニ挑發セラレザル事實ニ齟齬スル所アルヲ以テ後ニ  
 至リ兩説ヲ折衷シテ加答兒ト充血相隨伴シテ始メテ喘息ヲ喚起セシムル  
 トノ説出デ彼ノ特有ナル症狀ハ是等ニヨリテ氣管枝腔ノ狹隘ヲ來スニ因  
 ルト説明セリ。然レドモ實際上吾人ハ肺炎又ハ急性氣管枝炎等ノ際喘息様呼  
 吸困難ヲ招ク事ナク又後述ノグロースマン氏等ノ實驗ニ徴シテモ益此説  
 ノ不合理ナルヲ知ルニ至リス。  
 サレバ現今最多クノ讃助者ヲ有スルハ純神經説トス。然レモ此内ニ尙ホ種  
 種ノ異説ノ存スル在リテウヤントリッヒ及ビフオン、バムベルグ氏等ハ強直  
 性、橫隔膜、痙攣説ヲ唱フ。然レモリーゲル及ビエヂンゲル氏ハ實驗的ニ動物

ニ於テ橫隔膜神經ヲ切斷シ其末梢端ヲ刺戟シタルニ肺ハ一時吸氣ノ位置  
 ニテ静止シタルモ喘息狀發作ヲ現ハス事ナカリキ。且ツレウヤードールン及  
 ビシユレージンゲル氏等ガ發作中X光線徹照法ヲ行ヒタルニ確ニ橫隔膜  
 ニ運動ヲ認メタル等ノ事實ニヨリ現今此説ニ首肯スル者至テ少數ナリ。  
 而シテ當時最有力ナルヲ氣管枝筋痙攣説トス。抑モ肺ノ膨縮ハ血管ノ充實  
 ノ度ニ無關係ニシテ專ラ筋肉作用ニ由來シ隨テ呼吸ノ逼迫ヲ促スモノモ  
 亦其源ハ正ニ筋肉ニアル事ヲ證據立ツルベク諸多ノ實驗報告アリ。就中ブ  
 ランゲー及ビヂキンソンノ兩氏 (Journ. of physiol. XIX. P. 27.) ハ「マンコメーテ  
 ル」Ankometer ナル機械ヲ用ヒテ試驗セリ。是レ肺ノ一部又ハ全部ヲ捆ミ護  
 謨管ニヨリ氣壓計ニ連接シ以テ肺ノ膨縮ノ度ヲ畫カシムル裝置ナリ。今動  
 物ニ於テ肺臟ニ血液ヲ輸入スベキ總テノ血管ヲ結紮シ次デ肺ノ一部ヲ破  
 リテ出血ヲ促シ肺臟内ニ在ル血液ノ全部ヲ流出セシメテ無血ニ至ラシメ  
 然ル後、迷走神經ノ中樞又ハ末梢切斷端頸部分岐點ヨリ上部ニテ行ヘバ下  
 ノ結果起リ下部ナレバ起ラズヲ刺戟シタルニ肺ハ極度ニ收縮シ更ニ刺戟  
 ヲ除去スル事ニヨリ再ビ舊態ニ復スル事ヲ認メタリ。之ニヨリテ肺ノ縮小



ハ畢竟筋肉作用ニシテ其源ハ迷走神経ヲ經テ來ル興奮刺戟ナリト結論シ且ツ一步ヲ進メテ如此氣管枝筋肉ノ收縮ハ反射的ニモ起ル事ヲ實證シ(外皮腸胃粘膜炎及鼻粘膜炎)而カモ此際迷走神経ヲ切斷シオク時ハ反應全ク陰性ナルヲモ確メ更ニ進デエーテル及ビアトロピン等ノ藥品ガ喘息鎮靜ニ有力ナル理由ニ論及シ這般ノ藥品ハ孰レモ筋肉ヲ弛緩シ傍ラ充血ヲ促スモノナルヨリ見ルモ要スルニ喘息ガ全ク筋肉痙攣性ノモノナル事明白ナリト説キ且ツ試ミニ肺靜脈ヲ結紮シタルニ肺ニハ非常ノ鬱血ヲ來シタルモ一回ダニ喘息様呼吸困難ヲ喚起スル事ナカリシト云フ。

右ノ實驗ニ亞ギ更ニ類似ノ試驗ヲ行ヒタルヲフオン、アイントローフェン氏(Archiv f. Phys. 1802)トス氏モ亦肺ヲシテ全ク無血ノ狀トナサシメ其際血壓及呼吸ノ曲線ヲ畫カシメタルニ前者ハ著シキ變調アリタルモ後者ハ殆んど變化ヲ認メザリキ之ニ據リ氏モ亦喘息ハ血量ニ無關係ニシテ專ラ氣管枝筋ノ痙攣ナリトシ而カモ氏ハ一例ノ犬ニ於テ迷走神経切斷後ニ於テ尙ホ氣管枝筋ニ定期性收縮ヲ證明シタリトノ事實ニ礎キ該筋ノ收縮ハ神經ノ命令ニヨリテ起ルモノニアラズ全ク原發性ノモノニシテ迷走神経ハ寧ロ

之ヲ抑制シ緩縮ヲ調節スルモノトシアトロピン、クラレレ、ロトリン、クロロホルム等ノ藥品ハ全ク氣管枝筋ノ收縮ヲ抑制スル力ナシトシテ自己ノ説ヲ確證セント力メタリ尙ホ氏ハ只炭酸瓦斯ノミ該筋ノ收縮ヲ促スニ與テ力アリト言ヘリ(Phleger's Archiv, 1892. Bd. II.)

次デ同様ノ實驗ヲ試ミタルヲグロスマン氏トス(Archiv f. d. Phy. Bonn. v/Rh. 1892)氏ハ初メ充血説ニ左袒シ後轉ジテ痙攣説ニ移行シタリ最初氏ノ行ヒタル實驗ハ動物ニムスカリンヲ與ヘ(直ニアトロピンヲ以テ消毒ス)迷走神経ヲ刺戟シタルニ劇烈ナル呼吸困難ヲ惹起セシメタリ而カモ其際肺ノ血壓非常ニ増進セルヲ認メ喘息ノ病因ヲ充血ニ歸セシメントセシガ其後ノ實驗ニテムスカリンニテ中毒セシメタル動物ニ於テ右心ヨリ多量ノ血液ヲ注入シ肺ノ動脈並ニ靜脈ノ血壓ヲ俄然亢進セシメタルモ呼吸困難ノ來ル事ナク而カモ之ト同時ニ肺ヨリ血液ノ流出スルヲモ阻止セシガ同ジク何等ノ呼吸困難ノ徵ナキヲ確メ遂ニ痙攣説ニ變節セリ。

更ニ進デ氣管枝筋ノ作用ニ就キ精密ナル研究ヲ遂ゲタルヲアウフレヒト氏トス氏ハ熱心ナル組織的攻究ノ結果氣管枝筋ヲ構成セルハ古來信ゼラ



レタルガ如ク單ニ輪狀筋纖維ノミニ非ズシテ同時ニ縱走筋纖維ノ存在スル事ヲ發見シ、而カモ後者ハ前者ニ比シテハ其力遙ニ劣ル事ヲモ確メタリ。而シテ平時ニアリテハ是等ノ兩筋相俟テ働キ身體ノ諸種ノ機能ト外部ノ關係ニ準ジテ氣管枝内腔ノ調節ヲ掌レルガ一朝兩筋ヲ同時ニ支配セル迷走神經ヨリ刺戟ノ傳達サルルアラズ優力ナル輪狀筋ノ爲メ氣管枝腔ハ勢ヒ狹窄ヲ來シ爲メニ呼吸ノ困難ヲ喚起スルモノニシテ而カモ喘息ニ於テ特ニ呼吸ノ困難劇シキハ畢竟吸氣ニハ多數ノ所謂吸筋ノ活動盛ナルニ反シ呼氣ハ僅ニ肺自身ノ彈力、肋骨ノ重量ノ如キ微々タル授助ノ存スルノミナルヲ以テ必然呼吸ニ多クノ困難アル理由トシ如斯吸氣比較的容易ク呼氣至難ナル結果肺ノ貯蓄氣量自ツト増加シ内壓ノ増進ニ伴ヒ漸次氣胞壁ヲ押し擴ゲ以テ急性肺氣腫ヲ起スモノト説明ス。尙ホ最近ゴールド、ジュミット氏ハ此痙率ハ多クハ肺ノ一部特ニ中心部ニ起リ易キヲ以テ隨テ氣腫ハ主ニ邊緣ニ來ルト論ゼリ。

今ヤ吾人ハ雙手ヲ舉ゲテ氣管枝筋肉痙攣說ニ贊シ且ツ夫ヲ誘起スルモノハ必ズヤ神經ヲ經テ中樞ヨリ來ル刺戟ナリト想像セザルヲ得ザルナリ然

レ、此如此異常刺戟ノ源ハ果シテ神經機能症トスベキヤ中毒性ノモノナルカ、或ハ又中樞ニ於ケル特發性刺戟シ歸セシムベキヤ、或ハ全ク反射作用トナスベキカ、假ニ反射作用トセバ諸種ノ局所的疾患ノ原因的價値ノ輕重如何氣管枝加答兒又ハ充血ノ如キハ反射ノ淵源トシテ極メテ肝要ナラザルナキカ等疑問百出止ル所ヲ知ラズト雖モ要スルニ基スル所ニアラズ執レモ臨機原因的ノ資格ヲ備ヘ得ルモノトセバ執着ヲ離レ安心立命ノ境ニ遊ブヲ得ン。然レドモ現今尙ホ血管運動神經障礙(後章療法)アドレナリン條下ナイセル氏說參照或ハ分泌機能障礙等ニ歸セシムル說モ亦一方ノ重鎮トシテ覇ヲナセルヲ以テ結局迷走神經ノ官能不分明ナル期間ハ喘息ノ根本的解決モ亦決シテ望ムベカラズ。此外レーベルト氏ハ氣管枝筋及橫隔膜兩者ノ痙攣ヲ同時ニ採用セントシタルマ氏(Berl. Kl. Wochenschr. 1898)及ビ近時ストリウビンダ氏(Duitsch. Med. Wochenschr. 1906)ハ呼吸筋ノ共働機失調ニヨリテ説明セント企テタリト雖モ孰レモ其勢力極メテ微々タリ。



### 第五 喘息ノ診斷

特異ナル症候ト經過ニ留意セバ喘息ノ診斷ハ通常甚ダシキ困難ヲ感ズル事ナシ即チ發作性呼吸困難アリテ而カモ其性質常ニ呼吸性ナル事及ビ急性肺氣腫ノ存在及ビ肉眼的並ニ鏡檢的獨特ノ咯痰ヲ證明スル事ニヨリテ明ニ本症ヲ確診スルナリ。

前述ノ如ク喘息ニハ種々ノ分類ヲ設クル事ヲ得就中吾人ガ最診斷ヲ易シトナスモノハ彼ノ癩癩性喘息ナリ今迄ハ極メテ健カニテ何ノ訴フル所ナカリシ者ニ頓然呼吸性呼吸困難襲來シ其伸長セル呼吸時ニ於テ咻軋音及ビ笛聲ヲ聽キ而カモ顔貌ハ比較的建康ヲ示シ稍朝紅ヲ帶ブルカ又ハ輕度ノ蒼白ヲ認メ咯痰ハ全ク缺如セルカ又ハ少量ヲ咯出スル事アリトモ固有ノ所見ナク而カモ如此發作ガ三十分乃至三四時間ニテ自然ニ鎮靜スル際ハ吾人ハ殆ンド其診斷ニ疑惑ヲ挾ムヲ要セズ且ツ此際遺傳ノ有無健康時ノ狀態等ヲ參酌セバ往々診斷ニ資スベキモノアルヲ發見スル事アリ只此

種ノ喘息發作ト稍類似セルラバペド一氏病トス然レドモ再徐ノ徵候及ビ呼吸困難ノ性質等ヲ仔細ニ觀察セバ識別決シテ難事ニ屬セズ。加答兒性喘息ニアリテモ通常其診斷ニ大ナル困難ヲ覺ヘザルモ世上ニハ往々ニシテ主トシテ其發作性呼吸困難タル事ニノミ注目シ(前述慢性及ビ永續性加答兒性喘息參照)爾他ノ肝要ナル點ヲ穿鑿セザル結果往々誤診ニ陥ルノ虞レナキニ非ズ特ニ屢々呼吸困難ノ他覺的及自覺的一致セザル事アルヲ以テ小兒ニアリテハ一層ノ注意ヲ要ス。

今、日常誤診シ易キ疾患ニ就キ簡單ニ喘息トノ鑒別法ヲ陳述セン。

**肺氣腫** 眞性ノ肺氣腫ハ永續性ノ有機的疾患ナルニ反シ喘息ニアリテハ發作時ニ際シテノミ急性ニ氣腫ノ現ハレ來ルモ平時ハ全ク其存在ヲ認メ得ザルヲ通則トセルヲ以テ假令喘息ノ發作時ニ當リ始メテ患者ヲ診察シ直ニ眞ノ肺氣腫ノ合併アリヤ否ヲ確診シ得ザル事アリ得ルモノトスルモ平時ニ復セル後再ビ臨牀セバ兩者ノ識別豈至難ナリトセンヤ而カモ肺氣腫ニアリテハ單純ナル喘息ノ場合ト異リテ往々他ノ臟器ニ異常ノ存スルアリ例之ハ血管壁硬化症心臟肥大尤モ氣腫ノ際ハ單ニ打診ノミヲ以テ肥



大ヲ證明シ得ザル事論ヲ須タズ運動後容易ニ呼吸數ノ増加スル事且ツ容易ニチアノーゼヲ呈スル事及ビ病症ノ愈進ミタルモノニアリテハ往々尿中ニ<sup>(a)</sup>糖向ヲ證明シ得ル等ニ重キヲ措カバ益<sup>(b)</sup>鑑別ヲ易カラシム然レモ氣腫ノミニニシテ時ニ喘息ニ似タル發作ヲ惹起セシムル事アリ且ツ喘息ニアリテモ發作幾度トナク反復シ遂ニ慢性ニ移行シ更ニ永續性ヲ帶ブルニ至ラバ肺臟ノ彈力性日々ニ減退シ眞性ノ氣腫ヲ起スニ至ル事アリ而カモ如此喘息ニシテ益々猛進シテ終ニ後期ニ入レバ咯痰中ニ於テ固有ノ物體缺如スルニ至ル(ノイセル氏ハエオジン細胞ニヨリ常ニ肺氣腫ト喘息ヲ識別シ得ルトナシタルモ)ヲ以テ斯カル際ニアリテハ診斷上一層ノ注意ヲ要ス

**心臟喘息** ニアリテハ往々心臟肥大シ其運動不正ナリ隨テ脈膊不正ニシテ且ツ細カク屢<sup>(c)</sup>チアノーゼヲ呈シ心臟部ニ疼痛ヲ訴ヘ而カモ時トシテ發作ニ先チ既ニ僕麻質斯性乃至痛風性疼痛ヲ訴フル事アリ反之喘息ニ於テハ斯カル症候ヲ缺クガ如スルノミナラズ加答兒性ノモノニアリテ明ニ氣管枝炎ノ徵候ヲ具備シ固有ノ咯痰ヲ證明スル等ニヨリ誤診ニ陥ル事莫ルベシ

**肺水腫** 特ニ其末期ニアリテ喘息様徵候ヲ呈スル事アリ然レドモ諸多ノ症狀特ニ呼吸困難ノ狀態特有ナル淡黄色漿液性咯痰等ニヨリ辨別サル若シ愈困難ナル際ニハチカールン又ハストロファンツス等ヲ投與シ速ニ偉效アルニヨリ區別シ得

**毛細氣管枝炎** ニ於テモ喘息ニ似タル現象ヲ表ス事アリ然レドモ仔細ニ聽診セバ固有ナル水泡音ヲ聽キ且ツ突如タル高熱アリ呼吸困難モ亦喘息ト全ク趣ヲ異ニシ呼吸數ニ著シキ頻繁アリ

**格魯布性氣管枝炎** ニアリテ尙ホ充分ナル祛痰ノ行ハレザル前格魯布様偽膜又ハ纖維凝固物ノ咯出セラルル事アリテ輕視セバ喘息ト感フ事アリ蓋シ此際ノ呼吸困難ハ吸氣性ナル事及ビ高熱ノ存在並ニ往々強度ノチアノーゼ等ニ注意セバ鑑別極メテ容易ナリ

**爾餘ノ疾患** ニシテ往々喘息様發作ヲ挑發スルモノ多々アリ即チ前章喘息ノ意義ノ條下ニ列舉シタルガ如ク古來便宜上喘息ナル名稱ヲ濫用シ慣レタルモノニシテ其實喘息ニアラザルモノ孰レモ此處ニ論ズルモノニ一致セリ然レドモ之等ハ皆固有ノ徵候ニ缺ゲタルヲ以テ鑑別易々タリ



唯之等ニ似テ寧ロ喘息ニ加フベキモノニ枯草喘息及ビ中毒性喘息原因ノ條下參照アルモ極メテ稀有ノモノニシテ詳論ノ價値ヲ認メズ。

此他後環狀披裂筋麻痺喉頭又ハ氣管ハ窄窄ノ如キニアリテハ呼吸ノ困難常ニ吸氣性ナルト及ビ鏡下明カニ病竈ヲ認メ得ルトニヨリ鑒別容易ナリ。

又横隔膜喘息ナルモノアリ是レ稀有ノ症ニシテ横隔膜連綿痙攣スルニヨリ胸廓數秒時間吸氣的位置ニ静止シ吸氣ハ短ク且ツ痙攣狀ニシテ心臟ハ下内方ヘ轉位シ心窩膨隆シ指ヲ助骨弓下ニ送入スル事ニヨリ痙攣セル横隔膜ヲ觸ルルヲ得ベク患者ハ屢々横隔膜ノ附著部ニ疼痛ヲ感ズ。(病理ノ條下「喘息ノ本態」參照其他癡夢ト睡眠時俄然襲來セシ喘息發作ト誤ル事アリト云フモ前後ニ通シテ案ズレバ區別明ナルベク又實際醫療ヲ乞フ事モ極メテ希ナルベシト思ハル。

### 第六 喘息ノ豫後

喘息ハ其發作中死亡ヲ來ス事極メテ稀ニシテ如此ハ寧ロ例外ニ屬シ殆ン

ド曾テ直接ノ致命ヲ招キタル事ナシ然レドモ其根治サル、事モ亦多クハ期待シ得ザルベク往々終生ニ互リテ不絶患者ヲ惱マシ社會上ノ活動ニ非常ノ故障ヲ醸スヲ以テ頗ル煩苦ナル疾患ノ一ニ數ヘラル。

前章論述セル喘息各分類ノ豫後ヲ比較スルニ就中癩痲性喘息ハ最良好ニシテ屢々根治シ得ル事アリ之ニ亞グヲ發作性加答兒性喘息トシ稀ニ平癒ヲ期シ得ルモ慢性及ビ永續性ノモノニ至リテハ殆ンド凡テ不治ノ症ナリト云フモ決シテ過言ニアラザルヲ如何セン。

死因ハ多クハ他ノ副發症又ハ徐々ニ進行セシ心臟疾患ニヨル。

尙ホ患者ノ年齢ニモ多少ノ關係アリ一般ニ若年ニ於ケルモノハ老後ノモノニ比シ豫後佳良ナリ又ツルバン及ビスヘングレル氏等ニヨル時ハ喘息患者ニ從來結核ヲ併發スルモ之ニヨリテ喘息ノ經過ニ大ナル影響ヲ及ボス事ナシト云フ。



## 第七 喘息ノ療法

### 甲 豫防法

前章原因ノ條下ニ論述セシガ如ク喘息ハ屢々先天性素因ヲ有セルモノヲ犯スヲ以テ精神病乃至神經病の素因ヲ有セル者又ハ所謂喘息質ノ家族ニ屬スル者ニアリテハ特ニ充分ノ注意ヲ拂ヒ幼時ヨリ一般ノ衛生ニ懸念スベク就中皮膚ノ鍛練ヲ爲シテ以テ寒冒ニ犯サレザラン事ヲ努ムベシ。即チ平時吾人ノ獎勵スル所ノ冷水水療法ニヨリ或ハ開窓冷風ノ下ニ就眠セシムル等ノ手段ヲ講ズル事ニヨリテ上氣道粘膜抵抗力ノ増進ヲ圖ル等ノ如キハ偉效アルモノナリ。次デ稍長ジテ四歲頃ニ達セバ日々規律正シキ身體ノ運動ヲ營マシメ以テ呼吸ノ調整ニ務ムベシ。此他過度ノ肉食ノ如キハ忌ムベキ事トス。益々長ジテ小學校年齢トナレバ仔細ニ腦力ヲ試驗スベシ。何トナレバ如此先天性素因ヲ有セルモノニアリテハ往々腦髓ノ發育不全ナルモノアルヲ以テ日常學校成績其他諸方面ニ對スル知識ノ發育如何ヲ見

若シ不完全ノ節ノ存スルアラバ一層其訓練ニ努力スベシ。且ツ身體上ノ障害トシテハ特ニ呼吸機能ニ注意シ鼻腔ニ呼吸ヲ妨グルモノナキヤ或ハ爾餘何等カノ訴ナキヤヲ檢シ若干ノ病症アラバ直ニ専門醫家ノ診療ヲ乞ハシムベシ。此外日常ノ生活ニ於テ濃厚ナル珈琲、茶、酒又ハ喫烟等ヲ嚴禁シ且ツ塵埃多キ空氣内ノ生活ハ容易ニ加答兒ヲ誘導スルヲ以テ塵埃ニ富メル市街ヲ避ケ清淨ナル空氣ノ地ヲ撰ビ居住セシムベシ。又劇シキ神經過敏ナル患者ニアリテハ配慮スベキ點尙ホ多クアリ。例之バ一定ノ嗅覺ニヨリ嘔氣ヲ催シ又ハ嘔吐ヲ誘起スルモノアリ。或ハ一定ノ食物ニ對シ嫌忌ノ感ヲ起シ易ク強テ之ヲ食センカ忽チ不快ヲ覺エ往々諸多ノ皮膚反應ヲ呈スルモノアリ。蕁麻疹、匍行疹、濕疹、紅疹ノ如キ是レナリ。如此小兒ニアリテハ宜シク是等ノ點ニ留意シ若シ斯カル特異性アルヲ認メタル時ハ直ニ害因ヨリ遠カラシムベシ。此他女子ニアリテ特ニ注意ヲ拂フベキヲ月經時トス。何トナレバ第一喘息發作ノ往々此時期ニ際シテ襲ヒ來ルコトアルヲ以テナリ。

一 說トシテ交媾ガ喘息ノ鎮靜ニ多少ノ效果ヲ表スト云ヘドモ勿論信スベキニア



ラズ。唯ゴ氏ノ一例ハ妊娠時ニ當リテハ宿痾タル喘息ノ發作全ク其跡ヲ絶チタルガ産褥ニ入りテ再發シタルモノアリ然レドモ單ニ此一例ヲ以テ兎角ノ解決ヲ與ヘ得ザルヤ論ヲ俟タズ。而カモ概シテ第一發作ハ寧口結婚後發現スルモノ多數ナルガ如シ。蓋シ是レ交媾其者ニ關係アリヤ或ハ其際起ルベキ恐怖心又ハ反抗心或ハ生殖的興奮ニ由來スベキヤハ疑問ナリ。

### 乙 治療法

古來喘息治療ノ目的ニ試用サレタルハ植物性或ハ礦物性藥品或ハ物理的ノ方法ヲ問ハズ其數枚舉ニ違アラズト雖ドモ未ダ完全ナル方法ノ發見セラレザルヲ遺憾トス。然レドモ近時醫學ノ進歩ニ伴ヒ偉效アル方法ノ續出ヲ見ルニ至リシハ欣ブベキ現象ト云フベシ。

治療法ヲ分チテ症候的及原因的療法ノ二トナス

#### 一 症候的療法

通常喘息ノ藥品的療法ヲ分チテ發作時ノ療法及平時ノ療法トナシテ記述

スルモ余ハ例式ニ倣ハズ寧ロ不規則ニ配列シ箇々ニ就キテ典用スベキ時期ヲ添加スル事トセン。

**麻醉藥** 是レ專ラ發作時ニ於テ苦痛ヲ抑制スル效アリ。其作用ハ藥品ノ種類ニヨリ多少ノ相違アリト雖モ概ネ氣管枝筋肉ノ痙攣ヲ抑止シ且ツ筋痛其他ノ疼痛ヲモ併セテ鎮靜スルニアリ。就中最廣ク用ヒラレ而モ偉效アルヲ莫爾比涅抱水クロラール及アトロピントス。

#### ○莫爾比涅

##### 處方例一

鹽酸モルヒチ 〇・一  
グリセリン 各五〇  
淨水 皮下注射料(一回二分ノ一筒)

##### 處方例二

鹽酸モルヒチ 〇〇五  
白糖 一五



分三包各發作時一包内服

但シ莫爾比涅ハ連用ニヨリ易ク習慣性トナリテ其效力減退スル故エ漸次増量セサルベカラズ然シ莫爾比涅中毒ニ陥ル恐アルヲ以テ深ク注意ヲ加ヘ一日量〇・〇二五ニ達セバ直ニ中止シ速ニ他ノ療法例ヘバ「アトロピン」療法ニ移行スベシ。

尙ホ新ニ發病シ未ダ莫比ニ慣レザル患者ニ於テハ發作ニ當リ〇・〇一以上ヲ用フルヲ要セズ而モ此分量ヲ注射スル際ニアリテモ往々患者ハ尙ホ呼吸困難ヲ呈シナガラ次第ニ麻醉ノ進ムニ從ヒ恰モ重症ニ陥リ昏睡スルガ如キ感ヲ家族ニ與フル事アルヲ以テ始メテ莫比ヲ用フルニ當リテハ分量ニ注意スベキハ曰フモ更ナリ患家ニ豫メ危険ナキヲ證言シオクベシ。

○抱水クロラール(二〇—二〇)

處方例一

抱水クロラール

五〇

淨水

橙皮舍利別

各二五〇

每發作時五分ノ一頓服

處方例二

臭素加里又ハナトリウム

四〇

抱水クロラール

一〇

甘草羔

五〇

淨水

一〇〇〇

右調和每發作時與八瓦

但シ本藥品モ前者ニ比シテハ遙ニ安全ナレドモ而モ易ク習慣性中毒ヲ起スモノナルニヨリ相當ノ注意ヲ拂ヒ決シテ一日量五〇以上トナスベカラズ且ツ時トシテ本藥ニ特異性嫌忌性ノ者アルヲ以テ始メテ用フル患者ニハ多少ノ注意ヲ要ス。患者ハ往々夜間就眠中俄然襲來スル發作ニ備フルタメ豫メ枕頭ニ赤酒ト共ニ本劑ヲ用意シオク事アリ。

○アトロピン(〇・〇〇〇五—〇・〇〇一)

始メテ喘息ニ本劑ヲ試用シタルハグロリアムプロア氏ナリ。氏等ノ研究ニヨル時ハアトロピンハ迷走神經ヲ麻痺セシムル事ニヨリテ氣管枝平滑筋ノ痙攣ヲ抑止スルノ作用アリトシ實驗上動物ニ於テ迷走神經ヲ刺戟セバ肺氣腫ヲ起スモ豫メアトロピンヲ與ヘオケバ迷走神經ヲ刺戟スル事ニヨリ氣腫ヲ起サズト云フ

(Zaetzer, Therapie d. Gegenwärt., 1906) 且ツアトロピンニハ氣管内加答兒性分泌ヲモ輕減ス



ル作用モアリテ益々其効力ヲ是認セラルルニ至レリ (v. Perny, 1908)

處方例一

硫酸アトロピン

〇〇〇一

リグセリン

各五〇

淨水

皮下注射料(一回二分ノ一乃至二筒)

處方例二 (トルソー氏法)

第一ノ十日間ニ於テハ第一第二第三日ハ毎日〇〇〇一ヲ用ヒ第四第五第六日ハ毎日〇〇〇二ヲ用ヒ爾餘ノ四日間ハ毎日〇〇〇四ヲ用フ。

第二ノ十日間ニ於テハ毎日テレピン油(十二滴)ヲ膠囊劑又ハ舍利別劑トシテ三回ニ分服セシメ第三ノ十日間ニテハ毎日亞砒酸煙草一本ヲ喫煙ス。但シ毎度八吸引ヲ過スベカラズ。尙ホ此間空腹時ニ珈琲ニ溶カシ規尼涅皮末ヲ伍川セバ有效ナリト。

亞砒酸煙草ハ亞砒酸加里一〇ヲ淨水一五〇ニ溶カシ膠質ヲ去リタル紙ヲ取リテ其内ニ浸シ次デ乾燥スルヲ俟チテ二十片ニ等刻シ其各ヲ葉卷煙草型ニ卷キタルモノニシテ各〇〇五ノ鹽類ヲ含有ス。

處方例三 (ジュールゲンス氏法)

毎夕アトロピン〇〇〇一ヲ用ヒ一週間毎ニ〇〇〇一ヲ増シ四週間ニシテ其量〇〇〇四ニ達スレバ更ニ毎週〇〇〇一宛減シ舊ノ〇〇〇一ニ復セシム

處方例四

近時トロイベル氏ハ左ノ方法ヲ獎勵ス (Deutsch. med. Wochenschr. 1908)

莫爾比涅

〇〇一

アトロピン

〇〇〇五

但シアトロピンヲ永續連用スル時ニモ諸種ノ不快ナル症狀ヲ呈シ來ル。即チ咽喉ノ乾燥眼筋ノ調節不能眩暈ノ如シ。近時アルフレドフヤクレル (Deutsch. med. Wochenschr. 1910) 等ニヨレバ神識錯不安等ノ起ル事モアリト云フ。

以上三種ノ藥品ノ外是等ノ代價藥トシテ用ヒラルルモノ種々アリ。ハラアルデヒード(一回四〇ヲ砂糖水三〇〇ニ混ジテ用フ、是レ抱水クロラールニ似タル作用アリ。只一種忌ムベキ臭氣アルノ缺點ヲ有ス)抱水アミルム(クロラールニ似テ力稍弱シ)亞硝酸アミルム(其五滴ヲ容レタル硝子囊一個ヲ取リ手巾中ニテ押破リ其内容物ヲ吸入セシムルカ又ハ一〇〇ヲ與ヘ置キ



患者自ラ其三乃至五滴ヲ手巾ニ滴ラシテ吸入ス(ヘロイン(ヘロイン)〇、一五製丸塊適宜爲三十粒一日與三乃至四粒)磷酸コデイン(磷酸コデイン)〇、〇三(乳糖)〇、五爲一包頓服クエフラコ丁幾(一日一〇—二〇滴)アンチピリン屬特ニアンチピリン〇、三鹽酸モルヒネ〇、〇五乳糖〇、五爲一包頓服スコボラミン(是レアトロピンノ時間ヲ短縮セルモノト見做サレ目今需要廣シ注射ニハ〇、〇〇〇ニヨリ始メ慣ルニ順シ漸次六—八トナス)スコボラミン等ハ好テ用ヒラル。此外比較的稀ニ用ヒラルルハ阿片、別拉敦那、ニトログリセリン、クロラールアミド、エーテル、ストラムモニウム、クロロホルム、沃度エチール、臭素エチール、スルホナール、テレピン油、亞砒酸、ストリヒニン、エルゴチン、アンモニア、コカイン、ヒオスチアニン等ナリ

**薰烟法。**之レ一定ノ藥品ヲ以テ製セラレタル粉末、紙煙草、蠟燭ヲ燃燒セシメ其煙ヲ吸入スル事ニヨリテ喘息ノ發作ヲ鎮靜セシムル方法ニシテ其材料種々アリト雖概ネ左ノ如シ

○印度大麻草 莖及葉ヲ注意シテ乾燥セシメ充分ニ乾燥セルヲ俟テテ刻シテ細末トナシ次デ之ヲ硝酸液ニ浸シ後更ニ乾燥セシメタルモノニ

シテ或ハ葉卷莖ノ形トナシ或ハ其儘煙管ニヨリテ喫烟ス。本劑ハ特ニ發作ノ初期ニ用ヒテ效アリ。

○曼陀羅華 是レ此種ノ藥品中最モ有名ナルモノニシテ左記ノ如ク他ノ藥品ト混シ合劑トシテ用フルノ外此物ノミヲモ喫烟ス。即チ良ク乾燥セシメタル葉ヲ卷莖トシ或ハ煙管ヲ用ヒテ喫シ或ハ細末トナシテ硝石及樟腦ト混シ廣ク室内ニテ燃燒セシメ患者ヲシテ煙ニテ充チタル室内ニ略二十分間靜坐セシメ然ル後新鮮ナル空氣ト交代セシム。但シ本劑ニアリテ特ニ注意スベキハ量多ケレバ直ニ深キ麻醉状態ニ陥ル事ナリ。故ニ使用ニ當リテハ其度ヲ計リ過量ヲ避ケ且ツ連用ヲ嚴禁スベシ。

合劑ニ種々アリ

△ Cigarettes antispasmodiques

處方

曼陀羅華葉

三〇〇

水製阿片越幾斯

二五〇



△デスベル氏巻葎 (Espic. cigarum)

處方

別刺敦那葉

〇三

〇三六

菲沃斯葉

各〇一五

或ハ

各〇一八

曼陀羅華葉

阿片越幾斯

〇〇一三

〇〇〇七五

杏仁水

〇五

適宜

之ヲ製スルニハ前三者ヲ細末ニ刻シテ良ク混和シ之ヲ杏仁水ニ阿片ヲ溶カシタル溶液ニ浸シ後、良ク乾燥セシメ紙ヲ以テ卷キタルモノニシテ發作時ニ當リ一日二本ノ割ニ用フ。若シ直接喫烟シ得ザル時ハ室内ニテ燃焼セシムルモ亦佳ナリ。

△ゲラルト氏巻葎

別刺敦那曼陀羅華硝石罌粟殼搗碎セルヨリ成ル

△ボンベロン氏巻葎

グリンデリヤ、ロブスタノ葉及枝尖ノ酒精越幾斯ヨリ製ス

○此外種々ハ製劑アリ

△ロペリヤインレライタノ葉ヲ喫烟ス。

△樟腦巻葎△コカイン巻葎△ノイメル氏巻葎△ライヘンハルレル氏巻葎△シツマン氏巻葎△トルソー氏亞硝酸葎(前述等ナリ)。

又蠟燭ニモ種々アリ。通常用フルハラウシール氏喘息蠟燭ナリ。

○平常喫烟セザル患者ニアリテハ單純ハ煙草特ニ土耳其葎ハ發作鎮靜ノ效アリト云フ(サルター氏)

○硝石紙

可成氣孔ニ富ミ且ツ膠質ニ乏シキ紙ヲ擇ビ通常一ト五ノ比ニ溶カシタル硝石ノ水溶液ニ浸シ後乾燥セシメタルモノニシテ使用ニ際シテハ之ヲ細片ニ刻シテ陶器皿ニ載セテ點火シ立昇ル白色ノ蒸氣ヲ吸入セシムルナリ。此外一ト七五又ハ一ト一〇或ハ一ト一五ノ比ニ溶カシタル硝石液ヲ以テ製シタルモアリ。又硝石ト曼陀羅華丁幾ニヨリテ製シタルモアリ。

オイレンブルヒ氏ハ煙ヲ分析シテアンモニヤ、炭酸チアン、チアン加里、及少量ノ酸化炭素遊離カリウムヲ得タルガコツホ氏ノ分析ニヨレバ其主成分ハ炭酸アンモ



ニヤ炭酸及ビ水分ニシテ別ニ芳香屬ノ有機化合物ヲ含有シ特ニ刺激性ノ臭氣ハ主トシテ蟻酸ニヨレル事ヲ報告セリ。

蒸烟法ガ如何ナル理由ニヨリ喘息發作ヲ鎮靜シ得ルカニ就キテハコツホ氏ハ烟ガ氣道ノ粘膜炎ヲ刺戟スルニ基キ反射作用ニヨリテ痙攣ヲ制止スルモノナリトシゲルマン氏ハ烟中ニビリヂンヲ含有シ之ガ肺臟ヨリ吸收セラレテ血液内ニ入り其循環ニ伴ハレテ神經中樞ニ至リ其部ニ存在スル呼吸中樞ニ働クトシシエー氏ノ如キハ大ニビリヂンノ使用ヲ唱ヘタルモアイヒホルスト氏等ニヨリ其無効ナルヲ確メラル、ニ至リス、サレバ現今多數ノ學者ノ信ズル所ハ依然コツホ説ナリト知ルベシ。

**噴霧法** 此法ハ先年英國ヨリ有名ナルツッカー氏噴霧器ノ出ヅルニ當リ一種ノ秘密藥ノ此目的ニ向ヒ甚有效ナルモノトシテ發表サレ而カモ多クノ臨牀家ニヨリ偉效ヲ認定サルルニ至リ原劑ノ應用口々ニ隆盛トナリシ傍獨乙ニアリテ本劑ノ分析ヲ企ツルモノ續々輩出シ其分析ノ結果ヨリ推シテ原品ニ酷似セル合劑ナルノミナラズ寧ロ效力ノ優等ナルモノヲ産スルニ至リ又ヘルトラン氏 (Centralbl. f. innen. Med. 1905) ノ分析成績ハ

- 硫酸アトロピン 〇・一五
- 亞硝酸ナトリウム 〇・六
- グリセリン 二・〇
- 水 一五・〇

此外ニ分析ヲ難カラシムル爲メ全く無關係無効力ナル植物ノ浸劑ヲ混ゼルモノトス。

チユルツ氏 (Therapie d. Gegenwart, 1906) モアトロピンヲ主成分トシアイヒホルン氏 (Munch. med. Wochenschr. 1907) ン

- 鹽酸コカイン 一〇・二八%
- 硫酸アトロピン 〇・五八一%
- グリセリン 三二・一六%
- 水 六六・二三%

トシ實地臨牀上左ノ處方ヲ用フル時ハ原劑ニ劣ラザル效アリト説ケリ

- 鹽酸コカイン 一・〇
- 硫酸アトロピン 〇・五八



グリセリン 三二〇  
 水 六六〇

此他之ニ類スルモノ多シ (Präparat v. Fresenius, das Vixol, J. v. Scheellhorn u. a.)  
 最近ゴールド・シユミット氏 (Munch. Med. Wochenshr. 1910) ノ報告セルハ

亞硝酸アリピン 〇.iii  
 亞硝酸オイシドリン 〇.一五  
 グリセリン 七〇  
 水 二五〇  
 松芽油 一滴

要スルニ是等ノ噴霧法ハ單ニ輕度ノ發作ニノミ適用スベキモノニシテ重  
 キ發作ニ對シテハ效力ナク且ツ多量ニ過グレバ相當ノ危險アリ唯稀薄ナ  
 ルコカイン(1%酒精溶液ニ數滴ノ薄荷油ヲ混ジタルモノ)ハ割合ニ永ク連用  
 シ得レドモ全ク無害ナルニアラズ。

此外鼻腔粘膜ニ一〇%コカイン水ヲ塗布スル事ニヨリ喘息發作ノ鎮靜ヲ見  
 ル事アリ。是レ該部粘膜ノ知覺過敏ニ基ク反射性喘息ニテ其源ヲ麻痺セシ

ムルニヨルベシト雖モ併セテ多少ノ全身作用モ與ツテ力アルベクゴール  
 ド・シユミット氏ニヨル時ハコカインノ鼻腔内塗布ノ際一般中毒病狀ヲ起シタル  
 事アリト云フ。但シ如斯ハ勿論稀有ノ事ナルベシ。

又喉頭鏡ノ下ニテ薄荷油又ハ其製劑ヲ氣管内ニ注入シテ偉效アル事アリ。  
 通常二〇%ノ薄荷水一〇滴ヲ用ヒ而カモ此際肝要ナル注意事項トシテ記  
 載セラルルハ藥品ガ深ク聲門以下ニ達シ上部ニ附著セザラシムルニアリ。  
 何トナレバ藥品上部ニ止ル時ハ往々粘膜刺戟ノ爲メ聲帶ニ痙攣ヲ起シ不  
 快ノ結果ヲ表スコトアリト云ヘバナリ。特ニ此方法ハ慢性ノ喘息ニ有效ナ  
 リト。近時同一ノ目的ニ向ヒアドレナリン水(二千乃至四千分ノ一)ヲ用フルモ  
 效力アリト云フ (Grafmuhl-Matthews, Britisch. med. Journ. 1910)

アドレナリン注射療法。アドレナリンハ副腎ヨリ産スル一種ノエンチームニシ  
 テ其末梢血管ヲ狭窄スル作用ヲ利用シ吾人ハ日常局所ノ充血ヲ去ラシメ  
 或ハ實質性出血ヲ止ムルノ目的ニ使用スルモ近時喘息發作鎮靜ニ向テモ  
 需要益多キニ至レリ。實際幾多ノ經驗家ノ報告ヲ綜合スルニアドレナリンヲ  
 此目的ニ用フル時ハ其效力ノ迅速ニ現ハレ來ル事モルヒンアトロピン抱水ク



ロラール等ノ優ニ及バザル所ニシテ而カモ道般ノ藥品ニ比シ嫌フ可キ副作用ノ極メテ少キニヨリ廣ク世ノ歡待ヲ受クルニ至リヌ。而シテ特ニ本劑ノ適應セルハ比較的若キ年齢ノ者ニシテ永續性ノ肺氣腫ナク且ツ心臟及血管ニ硬化ナキモノナリ。用法ハ其一千分ノ一溶液ノ〇.五立方糎ヲ皮下ニ注射スルニアリ。然ル時ハ通常十乃至十五分ニシテ明ニ奏效ス。尙ホ最近ゼーゲル氏 (Zentral-Bl. f. inn. Med., 1910) ハ本劑ト酸素トヲ併合シテ用ヒ偉效ヲ奏シタリト云フ。

余ハ今ヤ進ンデ果シテ然ラバ何ヲ以テアドレナリンガ如斯喘息發作鎮靜ニ有效ナルヤノ理ヲ究メント欲ス。

前記ノ如ク本劑ガ交感神經ヲ刺戟シ血管ヲ狹窄セシムル能力アル事ハ既知ノ事實ナルガ吾喘息ニアリテハナイセル氏其他ノ學者ニヨリ公ニサレタル所ニヨレバ血管運動神經障礙ニ基ク肺臟内血管ノ擴張アリテ其結果氣管枝粘膜ニ充血ヲ來シ粘膜ハ爲メニ腫脹シ内腔ノ狹窄ヲ來サシメ以テ呼吸困難ヲ生ゼシムル場合モ多クアリトシナイセル氏ノ如キハ喘息ニ於テ呼吸困難ノ外往々同時ニ皮膚ニ於テ血管運動神經障礙ニ由リテ起リタ

ル諸種ノ反應ヲ證明シタリ。今假ニ此說ヲ正確ナリトセバアドレナリンヲ如斯場合ニ用フレバ擴張セル血管壁ノ收縮ヲ促シ充血ト其結果タル内腔狹窄及ビ呼吸困難ヲ治シ得ルト考フル事理ノ當然ナリト云フベシ。(但シアドレナリンハ總テノ血管ヲ同様ニ狹窄セシムルニハアラザル如クランゲンドルフ、エビンゲル、ヘツス氏等ニ據レバ心臟ニ於ケル冠狀動脈ハ反テ擴張スルト云フ。又肺臟内ノ血管ハ元來交感神經ノ支配外ニアリテ而モ果シテアドレナリンニヨリテ狹窄セラルルカニ就キテハ確證ナシト雖モ多分ハ其働キアルモノ、如シトス)然レドモ茲ニ吾人ハ更ニ進ンデ解決ヲ求ムベキ尙ホ一二ノ疑問ヲ有ス。何ゾヤ。是レ余ガ前ニ喘息ノ病理ノ條下ニ論說セルガ如ク喘息ニハ假令ナイセル氏ノ唱フルガ如ク血管運動神經障礙ニヨルモノ、存在シ得ルモノトスルモ而カモ單獨ニ氣管枝平滑筋ノ痙攣ノミニヨルモノモ亦存在シ得ル事ハ爭ヒ難キ事實ニシテ臨牀上後者ニ屬スベク考ヘラルル際ニ於テモ往々アドレナリンヲ用ヒ其發作ヲ鎮靜シ得ル事アリ。之ニヨリテ想フニアトロピンノ喘息ニ對シ卓越セル效果ヲ占ムル所以ハ其迷走神經麻痺ニヨリ氣管枝筋ノ痙攣ヲ鎮止スルニアルガ如クアドレナリン



ニ於テモ或ハ血管運動神經刺戟ト同時ニ併セテ氣管枝筋肉運動神經麻痺ノ作用ヲ兼有シ以テ喘息ノ二大病源ニ對シ同時ニ作用スルニアラザルナキカ是レ今後病理ノ攻究ト相俟テ研究スベキ一大問題タルベシ。

此他其病源ノ那邊ニ在ルヲ問ハズ吾人ガ臨牀上アドレナリンヲ用ヒテ發作ヲ鎮靜セシメ得ル際精密ニ當時ノ血壓ヲ計リタル成績ヲ參照スルニ發作鎮靜ニハ充分ナルベキ量〇、五立方糎ニテハ概ネ血壓ノ亢進ヲ見ル事ナク一〇立方糎ニシテ始メテ之ヲ證明シ得ルト云フ。此事實ハアドレナリンガ其量〇、五立方糎位ニテハ專ラ肺臟内血管ニ作用スルモノナルベキカ將又他ニ由來スベキ理由ノ存スベキヤラン現今未ダ明確ナル説明ナキモノ、如シ。尙ホアドレナリンガ單ニ喘息發作鎮靜ノ目的以外ニ持續的治療法トシテ應用シテ效果アリヤ否モ亦未知ノ事項ナリトス。

沃度鹽類 沃度加里ヲ喘息ニ用ヒ有效ナルハ古來既知ノ事實ニシテ現今ニテモ特ニ平常ノ持藥トシテ此右ニ出ヅルモノナシ。蓋シ發作時ニアリテ鎮靜ノ目的ニ用フルニハ平時ヨリモ其量ヲ増シ多少ノ效果ヲ表スト雖モ彼ノアドレナリンモルヒンプトロピン等ニ比セバ其效力甚ダ微々タルモノニシ

テ僅ニ極輕度ノ發作ノミヲ制止スルニ止マルヲ以テ此目的ニ向テハ適應シタルモノニアラズ。要ハ發作時平時ヲ問ハズ永續的ニ用ヒ喘息夫レ自身ノ治療ヲ圖ルニアリ。通常一日〇、五乃至一〇ヲ用ヒ發作時ニハ二〇—三〇ニ増量スル事アリ。特ニ極少量ヲ數年連用セバ偉效アリト云フ。

處方例一

- 沃度加里(又ハ「ナトロン」) 〇、五
- 單舍利別 一〇〇
- 淨水 一〇〇〇

右一日六回分服二日分(數年ニ互リテ持續連用ニ適ス)

處方例二

- 沃度加里(又ハ「ナトロン」) 一、〇
- 橙皮舍利別 七〇
- 淨水 一〇〇〇

右一日三回分服一日分

處方例三



沃度加里(又ハ「ナトロン」) 一〇〇  
重曹 二〇

研和十包ニ分チ膠囊ニ容レ一日ニ乃至三包ヲ與フ(發作時)

處方例四

沃度加里 二〇  
抱水「コロラール」 二〇  
橙皮舍利別 七〇  
淨水 一〇〇〇

右一日三回分服(發作時)

喘息ニ對スル沃度ノ效力ハ一般ニ其祛痰作用ニヨルモノト考ヘラレタ  
ルモローゼー氏(Virch. Arch. 1866, Bd. 36.)、ブーメンベルグ氏(Arch. f. exp. Path.  
u. Pharm. 1876)其他ノ學者ニヨリ沃度ニ祛痰作用ナキ事ヲ確證サルルニ  
至リ今ヤ其效果アル泉源ヲ沃度ノ麻醉作用ニ歸シ即チ氣管枝筋ヲ支配  
セル神經ノ末梢部ニ作用シ該筋ヲシテ次第ニ麻痺ニ陥ラシメ痙攣ヲ去  
リ且ツ豫防スルモノナリト説明サル而シテ如斯沃度ノ麻醉作用ヲ實證

シタルロビンツ氏(Arch. f. exp. Path. u. Pharm. 1881)トス氏ノ實驗ハ蛙ヲ一  
個ノ小サキ玻璃鐘ニテ蔽ヒ其内ニ一片ノ沃度槐ヲ投ジ置キタルニ僅ニ  
一時間ニシテ昏睡状態トナリ脊位ニ倒レ翌日ニ至リ遂ニ死亡シタリ。尙  
ホ進ンデ氏ハ如此沃度ノ麻醉的作用ハ沃度ガ容易ニ酸素ヲ阿巽化スル  
性ニ基クト説明ス。是レ凡テ酸素ノ酸化力ヲ増進セシムル藥品ハ概ネ麻  
醉作用ヲ有スル通性アレバナリ。

如斯沃度ハ喘息治療ニ必須不可缺藥品ナリト雖モ往々本劑ニ對スル特異  
性アリテ或者ハ容易ニ呼吸器ノ痙攣ヲ惹起シ或物ハ皮膚ニ發疹ヲ生ジ或  
ハ胃痙攣ヲ起ス等諸多ノ嫌フベキ副作用ヲ呈スル事アリ。故ニ近時は等ノ  
副作用ヲ除カントシテ製出サレタル沃度劑多々アリ。孰レモ臨機適用セバ  
同一ノ效アリ。例ヘバ沃度アンモン、沃度アルブミン、ゲリヂン、ヨヂピン、サヨヂン等ノ  
如シ。就中メルレル氏ハ特ニゲリヂンヲフランツ氏ハサヨヂンヲ愛用シ近時  
ゴールド、シュミット氏ハ沃度アンモンヲ賞用シ而カモ左記ノ處方ニヨリ阿片劑  
ト伍用ス。

處方



沃度アンモン 五.〇  
 安息香阿片丁幾 二〇.〇  
 礫砂加茴香精 〇.二  
 單舍利別 一五.〇  
 淨水 一六〇.〇

右一乃至二時間每一食匙宛

其他ノ藥品 是レ主ニ沃度劑ノ代價藥トシテ用ヒラルルモノニシテ概ネ特殊ノ效力アルヲ聞カズ。列舉セバ左ノ如シ。

○亞砒酸

處方例一

亞砒酸「カリウム」液 各二.五  
 薄荷水

右調和一日二回二滴ヨリ始メ二日毎ニ一滴滴増量

處方例二

亞砒酸ヲ丸藥トナシ毎日三回各〇.〇〇二五ヲ食後ニ用フ。但シ一ケ月中八乃至十日

間休止ム。

處方例三

亞砒酸 〇.〇六  
 鹽酸規尼涅 四.〇  
 硫酸アトロピン 〇.〇三  
 龍膽越幾斯 四.〇

右研和丸子六〇トナシイリス末ヲ丸衣トナス。一日一粒漸次四粒迄増ス。

處方例四

フオーレル水 五.〇  
 苦味丁幾 一〇.〇

右一日三滴ヨリ始メ各日二滴滴増シ二〇滴ニ至ル

○臭素加里又ハ臭素ナトロン〔往々好ンデ用ヒラル特ニ沃劑ト併用セバ效著シ〕

處方例

臭素那篤倍談 三〇



沃度加留謨	一五
苦味丁幾	二五
單舍利別	一〇〇
淨水	一〇〇〇

右一日三四分服

○魯別利亞丁、幾(三〇乃至五〇——一五〇)  
 ○鹽酸規尼涅(〇・五)

○オキシガンフル ○硫黄(ツスクロス氏ノ喘フルモノニテ一日ノ極量)  
(チ〇五——一〇トシ數月ニ互リ連用ス)

○チウレチン ○吐根 ○セチガ ○吐酒石 ○アボモルビン

○此外ビルー、マウレル氏ハ特ニ小兒ノ喘息ニ向ヒ發作時ニピリヂン(純ピリヂン五〇ヲ與ヘ一回一〇——二〇滴ヲ水五〇〇ト共ニジーグレ氏器ニテ吸入セシム)及硝石紙ヲ用ヒ平時ニハ硫黄又ハ砒素ヲ含メル水ヲ連用セシム。

又ビラルド、マレット氏ハ特異性夏日加答兒 Henschupfen ノ特效藥トシテ製セラレタルツンバール氏ポーランチンヲ勸ムルモ效ナシ(ポーランチンハ

ボーレン毒ヲ馬ニ漸時增量ニ用ヒ最後ニ得タル血精ナリ)

### 二 精神的療法

是レ神經性乃至精神性喘息ニ對シテハ唯一ノ手段ニシテ又往々偉效ヲ奏スル事前章其條下ニ詳述シタルガ如シ。要ハ患者ノ精神ヲシテ安靜ヲ保タシメ深ク醫師ニ信賴セシムルニアリ

### 三 物理的療法

本法ノ原理ハ畢竟喘息ノ呼吸性呼吸困難ナルニヨリ物理的ノ手段ニヨリ肺ノ彈力缺乏ヲ補助シ以テ呼吸時ニ際シ肺臟ヨリ空氣ノ呼出サル事ヲ促シ其困難ヲ鎮靜セントスルニアリ。以下其方法ヲ略述セン。  
 就中最簡單ナルハ呼吸時ニ當リ兩側ノ上肢ヲ高ク頭上ニ擧ゲシムルニアリ。之ニヨリ往々一二時間ハ呼吸ノ困難ヲ忘ルル事アリト雖モ此際劇シキ疼痛アリテ到底應用ニ適セズ。蓋シ強テ半時間ニ互リ反復スル事ニヨリ奇效ヲ占ムル事アリト云フ。  
 又徐々會話セシメ或ハ書籍ノ音讀ヲナサシムルモ亦多少呼吸ヲ調整スル效アリ(タルマ、ゼンゲル、レンネック氏等)又出來得ル限リ永ク數字ヲ數ヘシメ



呼吸其極ニ達シ難堪ニ至テ(最初ハ六八ヲ極度トシ慣ルレバ十六、十八、二十迄ニ至リ得ル)始メテ呼吸ニ移リ而カモ可成呼吸時ヲ短縮シテ次ノ數字朗讀ニ復ラシムルモ多少ノ效アリト云フ(ゼンゲル、ジーゲル、ストリウビング氏ハ有效トシタルモゴールド、シムット氏ハ好果ヲ得ザリシト云フ)

此外一定ノ體操療法アリ。就中主動的及ビ受動的ノ別アリテ或ハ別々ニ行ヒ又ハ兩者ヲ併セテ行フ。主動的體操ニモ種々ノ法式アリ。ジーケル氏ハゼンゲル氏ノ法ヲ獎勵シ(Wien. Kl. Wochenschr. 1907) フン氏(Therapie f. Gegenwart 1909)ハシレーベル氏法(Schreiber: aerzliche Zimmer-gymnastik, Leipzig 1905, 30 Aufl.)ニ於ケル第十三第二十四第二十及第三十四ヲ應用シ只少シク之ヲ改良セリ。

1. 上臑ヲ後方ニ強ク伸バヌ
  2. 身體ヲ眞直ニ伸バヌ
  3. 身體ヲ後及ビ前方ニ屈ム
  4. 木棒ヲ兩手ニテ握リ高ク差掛ケ
- 尙ホコ氏ハ體操ヲ行フ際頭下ニ鏡ヲ置キ呼吸ノ際其面ニ生ズル曇リニヨリ如何ナル程度ニ空氣ノ呼出アルカヲ見バ趣味深シト言ヘリ。又フランク、キルヒベルヒ等ハ體操ト同

時ニ脊部胸部及腹部ノ按摩ヲ獎勵ス。

受動的體操法ニハ諸種ノ裝置アリ。是等ハ畢竟器械作用ニヨリテ胸部ヲ押し空氣ヲ肺ヨリ排出セシメントスルモノニシテ有名ナルフロックスバハ氏呼吸椅子トス。其他之ニ類シタルモノニホーフバウエル、チュルチエル其他ノ裝置アルモ孰レモ實用ニ適セズ。又他ノ方法トシテ呼吸時ニ氣道ヨリ空氣ヲ吸ヒ出ス裝置モアリ。就中有名ナルハワルドムブルヒ氏器ナリ。ビーデル、フレンケル并ニクーン氏ノ如キモ同様ノ裝置ヲ案出シタリ。然レドモ是等ノ器械ハ氣管及氣管枝壁ガ堅固ニシテ不撓ノモノナリトセバ幾分カ效力アルベケレド實際上柔軟ニシテ弛緩性ヲ帶ビタレバ強テ内部ノ空氣ヲ吸出セントセバ其陰壓ニ對シ氣管枝壁ハ内部ニ灣曲シ來リ互ニ相接シテ以テ益、空氣ノ呼出ヲ難カラシムル理ナリ。故ニ是等ノ裝置ハ單ニ吾人ガ實地上設備シ得ザルノ不便アルノミナラズ理論上並ニ實驗上ノ效力價值モ極メテ乏キモノナリ。

此他有名ナルモノトシテ氣室裝置 Pneumatischer Kammern あり。是レ壓迫セル空氣ヲ吸入セシメ喘息發作ノ際起リタル肺ノ酸素吸收ノ不足ヲ補ヒ苦痛



ヲ去ラントノ趣意ニ出タルモノナリ。是レ特ニ體操療法ト併用セバ慢性ノモノニ於テ效果アリト云フモ吾人ノ實用ニ適セス。此外稀薄ナル空氣或ハ酸素又ハ過酸化水素ヲ吸入セシムル方法モアリ。

轉地療養ハ喘息ニモ亦好デ應用サルルモノニシテ氣節ニ應ジ緩和ナル氣温ヲ有シ塵埃ニ乏シク濕度適宜ナル地ヲ撰ブベシ。尤モ喘息患者ハ土地ノ衛生的價值ノ如何ニ係ラズ單ニ療地スルト云フ事ノミニテ忽チ發作ノ鎮靜ヲ見ル事往々經驗セラレタル所ナリ特ニ精神性神經性ノモノニアリテハ地方的關係ニ最モ重キヲ置クベキモノアル事原因ノ條下ニ述べタルガ如クニシテ又一般ニ高地ノ喘息ニ適スル事モ前記ノ如シ。即チ初メテノイマン氏ニヨリ唱ヘラレ後ツルバン並ニスベンダレル氏等ニヨリ讚賞ヲ得最近一九〇八トレンベル氏モ亦大ニ之ヲ獎勵セリ。ツルバシ及ビスベンダレル氏ハ高地ノ有效ナル理ヲ解イテ曰ク之レ畢竟高地ノ空氣稀薄ナルヲ以テ自然無意識ニ深呼吸ヲ行フト及ビ氣温寒冷ナルヲ以テ皮膚ノ練磨サルルニ據ルト又冷浴温浴共ニ喘息治療ノ目的ニ應用サル。冷浴トシテハ全身浴モ用ヒラルルモ特ニ廣ク愛用サルルハ半身浴ニシテ初メ攝氏三二—

三〇至乃二八度トシ入浴中次第ニ冷劫セシメ六度ニ至ラシメ又ハ先ヅ患者ヲ空虛ナル湯槽内ニ座セシメ脊及ビ胸部ニ手桶ヲ以テ二四度位ノ水ヲ注ガシムルモアリ。又之ヨリモ稍緩和ナルハ患者ヲ同ジク空虛ナル湯槽内ニ坐セシメ水鐘ニ附屬セル漏斗ヨリ三〇度ノ水ヲ細雨トシテ注ガシム。次デ槽中ノ水二八度トナルヤ四%ノ割合ニ鹹水ヲ加ヘ略四乃至六分間其内ニ坐セシメテ後浴ヲ終ラシムルニアリ。以上孰レノ場合ニアリテモ浴ヲ終ラバ布ヲ用ヒテ充分ニ身體ヲ乾燥セシメ然ル後初メテ著衣セシムベク決シテフアーレルクナイブ氏等ノ管テ唱ヘタルガ如ク濕潤セル儘ニテ著衣セシムベカラズ。

温浴ハ效極メテ少シ。唯發汗浴ハ時トシテ良好ナル結果ヲ呈スル事アリト云フ。就中近時有名ナルラストリレンベル氏電燈浴 electriche Lichtbad n. v. Struenpelt, 1908トス。是レ發明ノ當時ニアリテハ一時偉效アルモノトシテ賛同サレタルモ其後日々ニ聲價ヲ失ヒタリ。要スルニ發汗浴ノ最モ簡便ニシテ清潔ナルモノタルニ止マルガ如シ。ゴールド。シュミット氏ノ經驗セシ所ニヨレバ發作性喘息十四例中本法ニヨリ發作ヲ鎮靜シ得タルモノ四何等ノ影



響ナカリモノ八、反テ苦痛ヲ増シタルモノニナリシト云フ、又同氏ガ慢性喘息ニ用ヒタル結果ハ十二例中ニテ良クナリシモノ三、無影響ノモノ六、悪シクナリシモノ三ナリシトゾ、此他藥物ニヨル皮膚刺戟モ明カナル效力ナシ、又X線モ發作鎮靜ニ應用サレタルモ著シキ效ナシト云フ、蓋シ該光線ノ效力アリト説ク者ハX線ニ照ラサル、事ニヨリ兼ネテ腫脹セシ氣管枝、淋巴腺縮小シ之ニヨリ今マデ神經ニ及ボシタル刺戟消失スルモノナリト論ズルモ勿論一督ノ價值ヲ有セズ)

近時尙ホ一種ノ著名ナル方法世ニ出デタリ、オットー、ギンチエル氏ノ感傳電流法、即チ是レナリ、氏ハ非常ノ速度ニテ間斷スル等價電流ヲ神經ノ經過ニ沿ヒテ流サシムル時ハ其神經ノ興奮性次第ニ減退シ時ノ進ムニ從ヒ該神經ノ支配セル部位ハ全ク知覺麻痺トナル事ヲ發見シ之ヲ臨牀上ニ利用シテ外科的ノ手術ヲ無痛ニテ行フ事ヲ得且ツ神經痛、痲瘋質斯性疼痛又ハ偏頭痛ノ如キヲモ治シ得タルヲ以テ更ニ進ンデ吾喘息發作ノ鎮靜ニモ應用スルニ至リヌ、蓋シ氏ノ説ニヨレバ喘息ハ迷走神經、副神經、橫隔膜神經及ビ交感神經等ノ興奮性過敏ニ基ク氣管枝筋及ビ其他ノ呼吸筋ノ痙攣ナル

ヲ以テ是等ノ神經ニ沿ヒ感傳電流ヲ流セバ自ヅカラ興奮性ノ過敏ヲ抑制シ以テ呼吸ノ整調ヲ促シ得ベシトノ希望ヲ懷キ實地ニ應用シテ偉大ナル效果ヲ奏シタリ、氏ハ此目的ニ使用スベク便宜ナル電氣器械ヲ製出シタルガ (Berl. kl. Wochenschr., 1908, s. 2022) 其械ニヨル時ハ電流ヲ間斷セシメ得ル極度一分時間一萬四千回ニシテ電流ノ強サハ治療ノ目的ニ向ヒテハ三乃至一〇ミリアマペールヲ用ヒ患者ノ疼痛ヲ訴フルヲ限度トシ持續時間ヲ略五—一〇分ト規定セリ、而シテ之ニ附屬セル電導子四種アリ第一、第二、第三、第四ト名ク、就中喘息治療ニ用フルハ通常第一及第二ニシテ第一電導子ハ陽極ニシテ二個ノ板ヨリ組織サレ居リ使用ニ當リテハ側頸部ニテ喉頭ノ側部(此部ヲ前記諸種ノ神經通過ス)ニ置キ而カモ二個ノ板中一ハ正中線ニ並行ニ他ハ鎖骨ニ並行ナル様ニ配置セシム、次デ第二電導子ハ胸部ニ置ク、是レ陰極ナリ、然ル後電流四「ミリアンペール」ヲ通ゼシムル時ハ五乃至一〇分ニシテ呼吸困難ハ次第ニ鎮靜シ自覺的及ビ他覺的苦痛次第ニ減退シ咯痰モ亦弛緩性ヲ帯ビ來リ且ツ囉音、笛聲ノ如キモ漸次消滅シ行クト云フ、若シ單ニ之ノミニテ鎮靜セザル時ハ更ニ進ンデ第一ノ代リニ第三電導子



ヲ用フル事アリ。第三電導子ハ消息子或ハ肉又形ヲナセル細長キ電導子ニシテ之ヲ中又ハ下鼻道ニ入レ其先端ガ鼻咽頭腔ニ達スル迄深ク挿入セシメ二乃至三「ミリアンペール」ノ電流ヲ通ゼシムル時ハ最初眼華閃發又ハ輕度ノ酸味ヲ覺ユルモ如斯ハ僅ニ五乃至一〇分ニテ消失シ追テ效果アル場合ハ呼吸困難ノ鎮靜ヲ見ルト云フ。オートー、ギユンチエル氏ニヨレバ此械ヲ坐右ニ備ヘナバモルペンヲ要スルガ如キ事殆ド絶無ナリト云フモ器械ノ高價ナルニヨリ實用ニ適セザルナリ。

四 原因的療法

原因的療法ハ各々ノ場合原因明ナルニ非ザルヲ以テ毎ニ之ヲ行ヒ得ザルヲ遺憾トス。一般ニ神經性乃至精神性喘息ニアリテハ專ラ精神ノ安靜ヲ圖リ又若シ或食物ヲ攝取スル事ニヨリ塵埃又ハ或香氣ヲ吸入スル事ニヨリ或ハ一定ノ場所ニ居住ノ爲メニ喘息ヲ患フルガ如キ者ニアリテハ速ニ是等ノ害因ヨリ遠ザカラシムルヲ肝要トス。又所謂反射性喘息ニシテ他ニ何等カノ疾患アリテ夫ニ附加シテ喘息ノ起リタルモノニアリテハ速ニ原因トナルベキ疾患ヲ治療スベシ。例之ハ鼻腔

咽喉内疾患加答兒粘膜炎厚腺狀組織及骨肥大。新生物等。氣管枝加答兒腸胃疾患。女子生殖器病。又ハ全身病。糖尿病。尿毒症。鉛中毒。痛風ノ如シ。



喘息及其療法終

明治四十四年十月三日印刷

明治四十四年十月十一日發行

喘息及其療法 附

正價金五拾錢

著者 加用信憲

發行者 小立鉦四郎

印刷者 野村宗十郎

印刷所 東京地活版製造所  
東京市京橋區築地三丁目十七番地



發行所

東京市本郷區湯島切通坂町八番地  
電話下谷 二三三〇、四八三九  
京都市下京區三條通寺町東入ル  
電話 五 四 六 二

南江堂書店

(振替貯金口座東京一四九)  
南江堂書店京都出張所  
(振替貯金口座大阪一一五〇五)











編一十第 編二十第 編三十第 編四十第 編五十第

東京帝國大學院  
攻醫學士福島尚純編

下顎關節炎及牙關緊急

醫學士宮田權之丞編

子宮出血及其療法

醫學士大久保直穆編

急性發疹症及其療法

東京帝國大學院  
攻醫學士丹羽元亮編

瘰癧及其療法

堤友久編

眼ノ外傷及其療法

正價	金四拾錢
郵稅	金四錢
正價	金五拾錢
郵稅	金四錢
正價	金八拾錢
郵稅	金六錢
正價	金四拾錢
郵稅	金四錢
正價	金五拾錢
郵稅	金四錢

編六十第 編七十第 編八十第 編九十第 編一十第

醫學士竹中成憲著

肋膜炎及其療法

東京帝國大學醫科大學  
婦人科 教授 室醫學士渡邊英吉造編

妊娠時ノ合併症及其療法

東京帝國大學醫科大學  
耳鼻咽喉科 教授 室醫學士赤松純一編

副鼻腔蓄膿症及其療法

東京帝國大學醫科大學教授醫學博士林春雄著

藥物學纂錄

京都帝國大學醫科大學講師醫學士笠原道夫編

小兒貧血症及其療法

正價	金八拾錢
郵稅	金六錢
正價	金五拾錢
郵稅	金四錢
正價	金八拾錢
郵稅	金六錢
正價	金五拾錢
郵稅	金四錢
正價	金七拾錢
郵稅	金六錢



編六廿第 編五廿第 編四廿第 編三廿第 編二廿第

醫學博士阿久津三郎著

泌尿器病纂錄

東京帝國大學醫科大學醫學士細谷雄太編

危險性耳病及其療法

東京帝國大學醫科大學教授醫學博士木下正中著

產科婦人科纂錄

醫學士森 文男編

腦出血及其療法

醫學士長谷川與一郎編

癩麻質斯及其療法

下クトル 田村六三郎著

下疳及橫痃

醫學士安藤重次郎編

汎發性腎臟炎

京都帝國大學醫學博士松浦有志太郎著

圓形禿髮症及其療法

東京帝國大學醫學博士三輪信太郎著

小兒科纂錄

醫學博士 横手千代之助著

衛生學纂錄

編一卅第 編十三第 編九廿第 編八廿第 編七廿第

正價 金八拾錢  
郵稅 金六錢

正價 金五拾錢  
郵稅 金四錢

正價 金九拾錢  
郵稅 金八錢

正價 金七拾錢  
郵稅 金六錢

正價 金五拾錢  
郵稅 金六錢

正價 金七拾錢  
郵稅 金六錢

正價 金八拾錢  
郵稅 金六錢

正價 金五拾錢  
郵稅 金四錢

正價 金八拾錢  
郵稅 金六錢

正價 金五拾錢  
郵稅 金六錢



編六世第 編五世第 編四世第 編三世第 編二世第

醫學士石川貞吉著

精神療法學

東京帝國大學  
醫學博士田中友治著

續尿病纂錄

京都帝國大學  
醫學士笠原道夫編

腺病質及其療法

醫學博士岡田榮吉著

內科學纂錄

千葉醫學專門學校  
授醫學博士三輪德寬著

外科學纂錄

正價金八拾錢  
郵稅金六錢

正價金九拾錢  
郵稅金八錢

正價金八拾錢  
郵稅金六錢

正價金八拾錢  
郵稅金六錢

正價金五拾錢  
郵稅金六錢

醫學士永野重業編

脊椎結核及其療法

醫學士加藤耕藏編

頭痛診斷及其療法

京都帝國大學  
醫學士笠原道夫編

小兒痙攣症及其療法

東京帝國大學  
醫學博士土肥慶藏著

皮膚病黴毒學纂錄

警察醫長栗本庸勝著

賣春ノ害毒及其豫防

編七世第 編八世第 編九世第 編十四第 編一十四第

正價金六拾錢  
郵稅金六錢

正價金五拾錢  
郵稅金六錢

正價金八拾錢  
郵稅金六錢

正價金壹圓  
郵稅金拾錢

正價金五拾錢  
郵稅金六錢



編二十四第 編三十四第 編四十四第 編五十四第 編六十四第

池田昌克編

耳病ノ療法

醫學士今村明光編

昏睡狀態及其療法

醫學士竹中正憲著

心臟病及其療法

醫學博士岡田和一郎著

鼻科學纂錄

醫學博士阿久津三郎校補  
羽太銳治編纂

攝護腺炎及肥大症

正價 金六拾錢  
郵稅 金六錢

正價 金四拾錢  
郵稅 金四錢

正價 金八十錢  
郵稅 金六錢

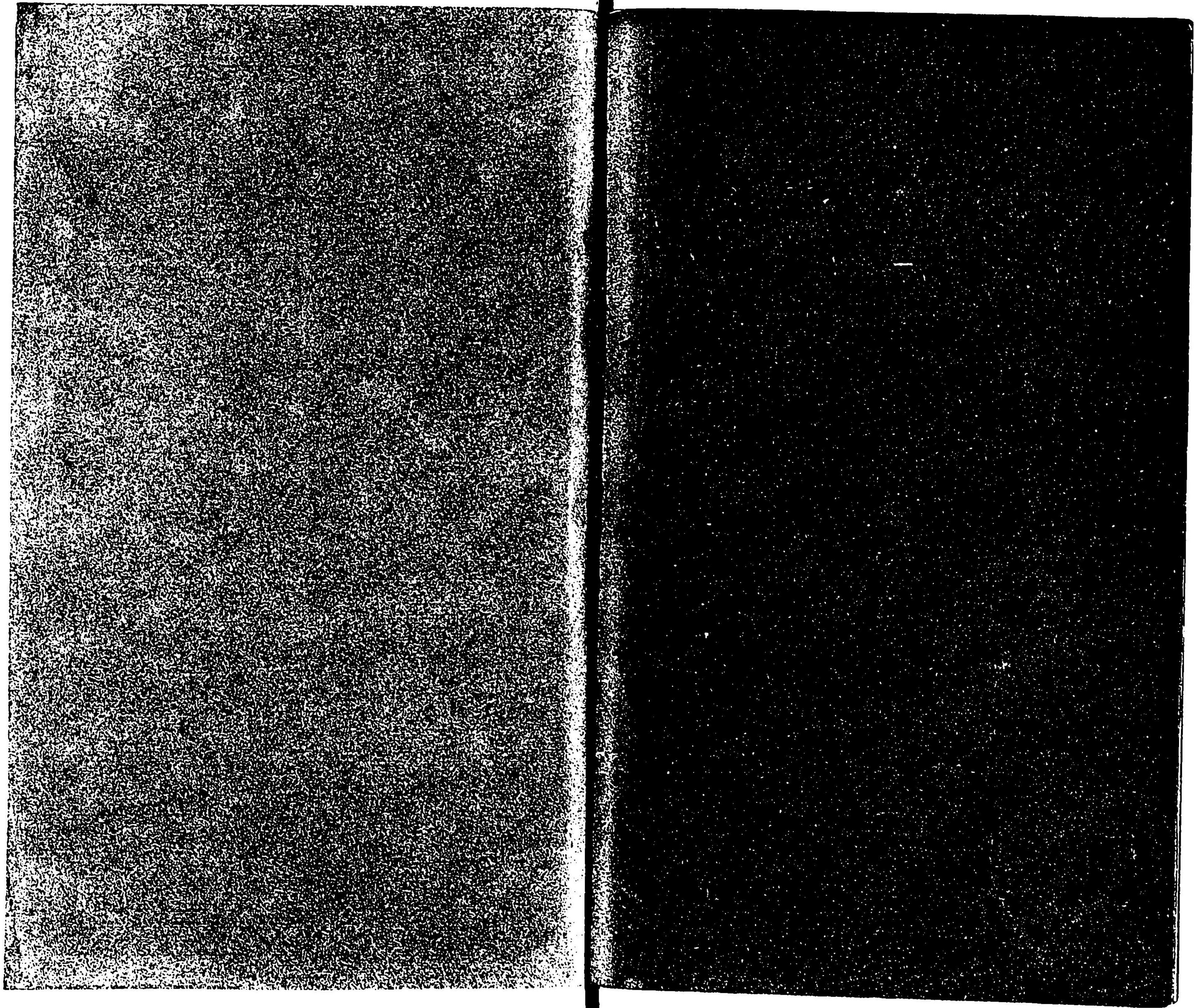
正價 金六拾錢  
郵稅 金六錢

定價 金六拾錢  
郵稅 金六錢



60
239

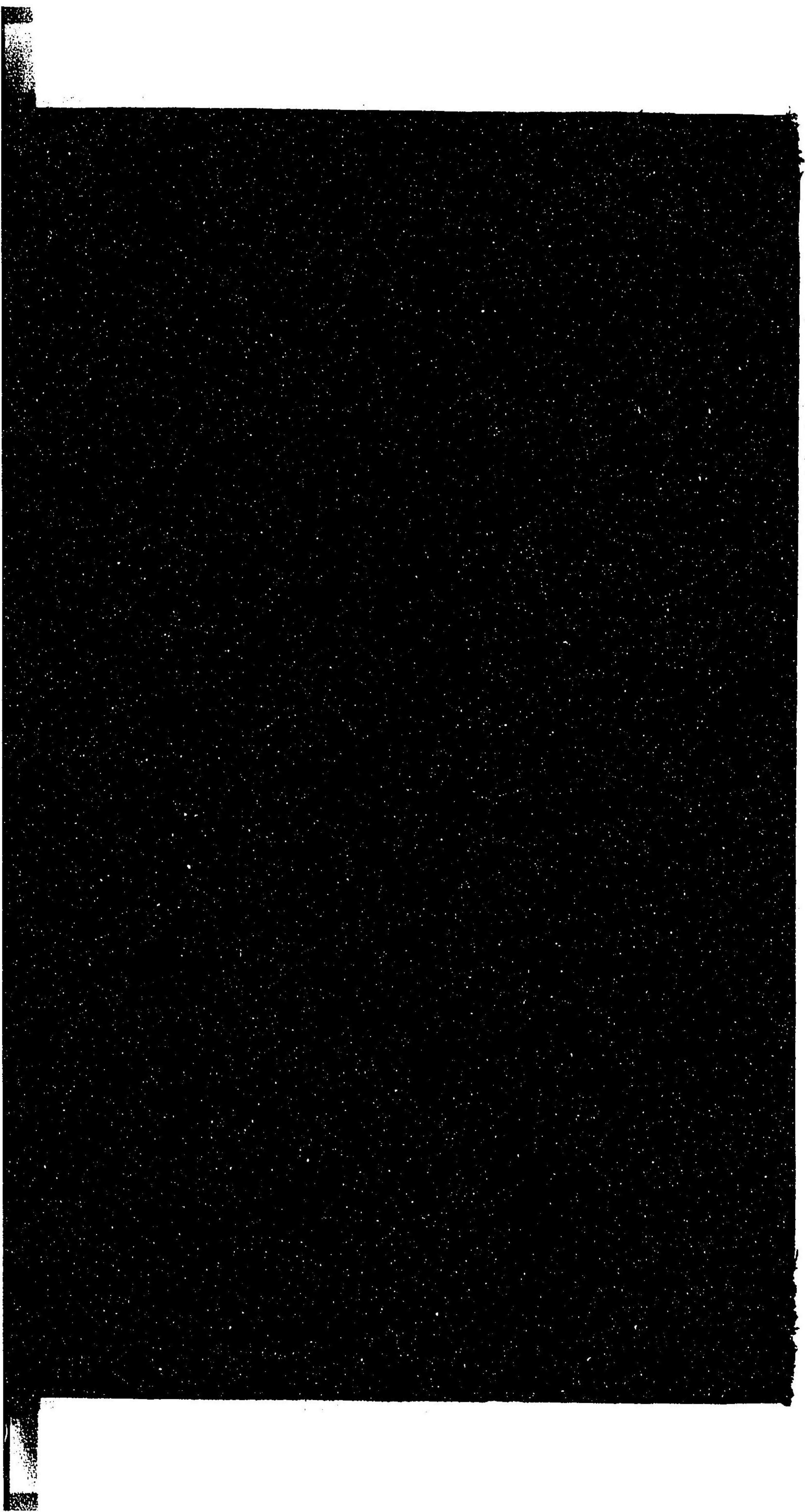






60  
別庫  
239







60  
239

059029-000-3

60-239

喘息及其療法

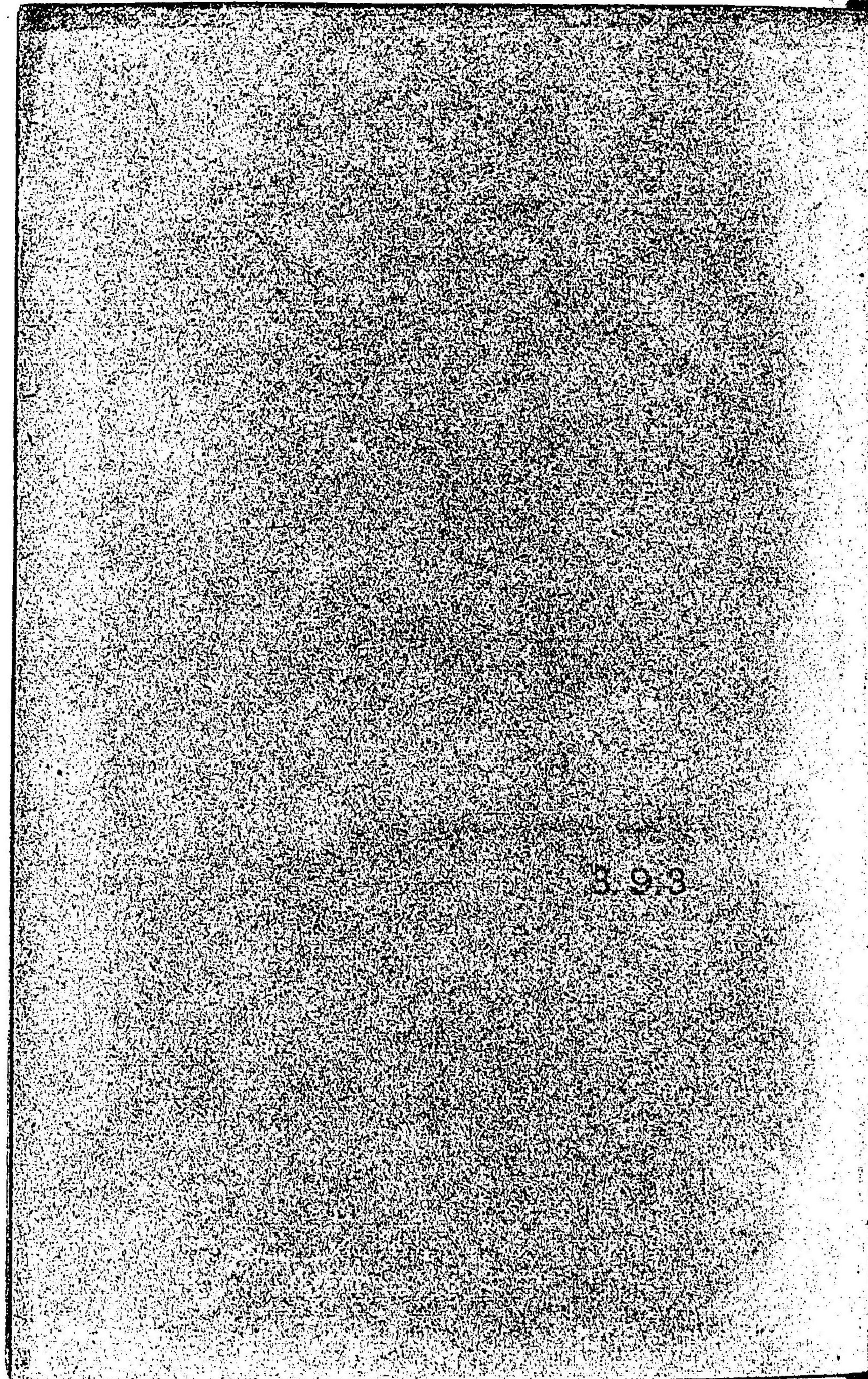
加用 信憲/編

M44

CBD-0138







393

